

## 教育開発支援機構

### FD 推進センター

#### I 2014 年度大学評価委員会の評価結果への対応

特に指摘事項なし。

#### II 現状分析

##### 1 教員・教員組織

1.1 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

①教員の質の維持・向上にどのように取り組んでいますか。

教育開発支援機構 FD 推進センター全体、センター内の各プロジェクト、各プロジェクトの連携による取り組みとして、教員の質的向上を図るための方策を実施し、恒常的な検証を行っている。各プロジェクトの方策は、以下のとおりである。

(1) FD 計画プロジェクト：教育の質的向上に向けた全学的活動の推進のための情報収集、分析、施策の企画・立案・提案。(2) FD 調査プロジェクト：「学生による授業改善アンケート」の実施・改善、アンケート結果の集計・分析。GPA の活用方法の検討と提案。(3) FD 開発プロジェクト：具体的な支援のための方法・ツールについての情報収集、分析、情報提供および提案。(4) FD 推進プロジェクト：新任教員オリエンテーション、教職員研修、シンポジウム・ワークショップ・セミナー等の企画・実施、『法政大学教育研究』の編集・発行、各学部等における取り組みの支援、学生 FD スタッフ活動の支援。(5) FD 広報プロジェクト：HP・FD ニュースレター・関連冊子による情報発信 (FD 学生の声コンクールの開催、FD ハンドブック・学習支援ハンドブックの発行。さらに 2012 年度より、新任教員 FD セミナーを実施し、各学部教授会等が主体となって実施する「授業相互参観」を導入、継続実施や FD ニュースレターを発行するなど、各学部で行われている FD 活動の紹介等も行っている。

##### 2 管理運営

2.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。

①センター長をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

FD 推進センター規程 (規定 829 号) に基づき、センター長、プロジェクト・リーダー、プロジェクト・メンバー、アドバイザー・ボード・メンバーを置き、同規定に定められた職務を実行している。また、規定に基づき、プロジェクト・リーダー会議を 10 回、アドバイザーボードを 3 回開催した。

##### 3 内部質保証

3.1 内部質保証システム (質保証委員会等) を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会 (質保証委員会等) は適切に活動していますか。

FD 推進センターの質保証活動を担うのはアドバイザー・ボードであり、FD 推進センター規程により年 2 回以上の開催することが定められている。2014 年度は年 3 回開催し、各回ではセンターの年度活動計画、中間報告及び活動実績と次年度への課題を提案・報告し、アドバイザー・ボードから助言・提案及びチェックを受けた。また、同内容は学部長会議においても報告され、同会議でも併せて意見をいただきながら、FD 推進センターの諸活動に反映している。なお、プロジェクト・リーダー会議は年 10 回 (2014 年度実績) 開催され、各プロジェクトの活動や提案事項についての相互チェックも行っている。

②質保証活動への教員の参加状況を説明してください。

教育開発支援機構長 (教員 1 名)、センター長 (教員 1 名)、アドバイザー・ボード (教員 20 名、職員 8 名)、プロジェクト・リーダー (教員 5 名) 及びプロジェクト・メンバー (教員 19 名、職員 7 名) が 2013 年度 FD 推進センターの事業活動に参加している。アドバイザー・ボードの教員メンバーの参加状況 (出席率) は、2014 年度第 1 回 20 名中 9 名 (45%)、第 2 回 20 名中 15 名 (75%)、第 3 回 (20 名中 13 名 (65%)) である。なお、大学評価室の指摘を受けて、学部長会議でアドバイザーボードの教員メンバー参加の徹底を要請した。

##### 社会連携・社会貢献【任意項目】

教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。

・教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動 (シンポジウムや公開講座など) を行っていますか。

一般向けの企画として第 12 回 FD シンポジウム (2014 年 11 月 8 日開催) を実施し、学外から 51 名の参加者があった。

・その他部局で取り組んでいる重点事項があれば記載してください。

2014 年度は 2013 年度に引き続き、日本私立大学 FD 連携フォーラム (JPFF) の代表幹事校を務め、JPFF 総会を本学で開催 (2014 年 6 月 14 日) した。

現状分析根拠資料一覧	
資料番号	資料名
1 教員・教員組織	
	・各プロジェクトからの報告書
2 管理運営	
	・FD 推進センター規程（規定 829 号） ・FD リーダー会議議事録 ・アドバイザー・ボード議事録
3 内部質保証	
	・アドバイザー・ボード議事録 ・学部長会議提出議題一覧
4 社会連携・社会貢献	
	・第 12 回 FD シンポジウム開催通知・チラシ・実施報告書 ・JPF 総会関係資料

### III. 重点目標

<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学生による授業改善アンケート」の Web 実施を引き続き行う。</li> <li>・「学生による授業改善アンケート」の回答率の向上のための施策を検討、実施する。</li> <li>・「学生による授業改善アンケート」の分析を行い、アンケート項目の見直しを検討し、学部長会議に提案する。</li> <li>・「学生による授業改善アンケート」および GPCA 全学 GP の集計結果を参考にし、教育の質的向上に向けた提案を行う。</li> <li>・学内の関連組織と連携し、シンポジウム・フォーラム・新任教員 FD セミナー・ワークショップ・ミーティングを開催する。</li> <li>・大学間連携による FD プロジェクトに参加し、情報収集を行う。「FD 学生の声コンクール」の充実をはじめ、学生参加型 FD への取り組みを強化する。</li> <li>・教育の質的向上に資する教育方法および教育ツールについて情報収集を行い、情報提供を行う。</li> </ul>
---

### 市ヶ谷リベラルアーツセンター

#### I 2014 年度大学評価委員会の評価結果への対応

<p>「新たな授業形態の導入に対する取り組み」について、シラバス記入を明示することによって、シラバスで新しい授業形態を明示した科目数が 30%ほど増加した。今後、この割合の変動に注目したいと考えている。</p> <p>「(事) 後シラバス」を導入した結果、シラバスに沿って授業が行われているかの検証が可能となった。その結果は、本文中に示したが、同時に達成度の検証が可能なシラバスの作成法が重要であることが判明した。</p>
---

#### II 現状分析

<h4>1 教員・教員組織</h4> <p>1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。</p> <p>①学位授与方針およびカリキュラムを前提とした教員像、教員組織の編制方針を明らかにしていますか。具体的に説明してください。</p> <p>各分科会単位でディプロマ・ポリシーを明文化し、市ヶ谷リベラルアーツセンター（以下、ILAC と略す。）の web ページを通じて広く公開している。同時に、ILAC 関連 6 学部（法・文・経営・国際文化・人間環境・キャリアデザイン各学部、以降「学部」と呼ぶ。）において、それぞれのディプロマ・ポリシーで教養教育の位置づけを明確化すると共に、それに必要な卒業所要単位数の設定を行っている。</p> <p>②採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。</p> <p>専任教員の採用にあたっては、運営委員会において担当科目を決定している。求められる教員像などの具体的な条件については、科目を管轄する分科会と新規採用教員の所属する学部との協議によって決められている。</p> <p>③組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。その体制について概要を説明してください。</p> <p>各分野を統括する分科会には委員長、各科目には科目責任者をおいている。また、2014 年度から学部の特化した基礎科目</p>
--

(一部の「基礎ゼミ」)について、該当学部の教授会主任を科目責任者とするとし、責任の所在の明確化を計った。更に、分科会・学部によって、以下の様な責任体制を整えている。

自然科学分科会では「自然総合講座検討委員会」を新たに設置した。

英語分科会では兼任教員との連絡を担当する「ゾーン責任者」、学部との連携を担当する「学部担当者」、更に「質保証委員会」、「カリキュラム委員会」が設置されている。

法政学の運営は「法政学運営委員会」で行われ、正副委員長をおいている。

キャリア関連科目については、「3D教育システムスタッフ会議」が質保証にあたり、必要な役割分担を行っている。

法学部では「基礎教育連絡会議」が設置されている。

文学部では学科毎に「基礎ゼミ」の質保証活動を行っている。

経営学部では「教養教育担当者会議」「英語教育担当者会議」が設置されている。

## 1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

①学部・学科のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。また、なぜそのように判断しましたか。

ILACでは多様なカリキュラムの円滑な運営を図るため、以下の様に組織を備えている。

・運営委員会：上記分科会の委員長と各学部の教授会主任、および学部長会議選出の2名の学部長から構成され、分野横断的・学部縦断的な視点で教養教育のカリキュラム運営に責任を負う。

・分科会：人文、社会、自然、情報、英語、諸語、保健体育の7つの学問分野にそれぞれの科目担当者が属しており、分野の教育に責任を負う。

・法政学運営委員会：上記分科会に属さない科目「法政学への招待」の運営について責任を負う。

・3D教育システムスタッフ会議：上記分科会に属さないキャリア教育関連科目の運営について責任を負う。

・前項に示したように、分科会内の教員組織もあわせて活動している。

②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

採用人事において、学部選出とリベラルアーツセンター選出の選考委員が協議することで、学部・分野において年齢が著しく偏らないような配慮を行っている。

## 1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。

①各種規程は整備されていますか。

人事採用に関する申し合わせ事項を明文化し、運営委員会で共有している。また、各学部では採用規程が設けられている。

②規程の運用は適切に行われていますか。規程に沿った募集・任免・昇格のプロセスを説明してください。

上記、申し合わせ事項の運用において問題点が発生した場合は、運営委員会で協議し改善している。各教授会では、明示された学部教員採用基準で行われていることを、チェックしている。

専任教員の募集・昇格については、該当学部の規程に従って行われている。ILAC科目担当の兼任教員人事は、募集については規程が無く、担当分科会がその都度適任者を推薦している。ILAC関連科目専任・兼任教員の任命は、該当分科会における資格審査後、運営委員会において資格審査を行い、その結果を学部教授会が承認することで、その手続きは完了する。

## 1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

①学部等内のFD活動はどのようになっていますか。

授業改善アンケートを分野別・言語別・学部別等に集計し、その集計結果をFDの素材として各分科会・学部で共有している。更に、3種類の授業参観（相互授業参観、新人研修としての授業参観、ビデオカメラを用いたセルフ授業参観）を設定し、各分科会・学部の状況に合わせた形式で実施した。その結果、13科目（32クラス）において上記の何れかの参観が行われた。

## 2 教育課程・教育内容

### 2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

①幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

ILACでは、0群から5群の科目群からそれぞれ万遍なく科目履修をすることで、多岐の分野に亘る教養が身につけられるようなカリキュラム編成をおこなっている。

2014年度に新たにカリキュラム委員会を設置し、「2013年度市ヶ谷教養教育体系化プロジェクト報告」で答申された「カリキュラム・フレーム」を実施に移すため、専任教員のアンケート調査などを行い、2017年度から開始する予定の「カリキュラム・フレームワーク」を作成した。

また、同時に「教養履修モデルプロジェクト」を設置し、体系化された教養教育カリキュラム上で展開できる様々な「履修モデル」を例示した。上記「カリキュラム・フレームワーク」については、各分科会・学部の大方の合意を取り付けることができたので、今後、具体的なカリキュラム構築作業に移行する予定である。

②初年次教育、キャリア教育はどのように展開されていますか。

初年次教育については、0群に設置されている「基礎ゼミ」「入門ゼミ」等により、原則各学部が担っている。キャリア教育については、「キャリアデザイン入門」が同じく0群に設置されている。2011年度に後期科目として設置された自校教育科目「法政学への招待」は、2012年度から前期に移動したことで、本学で学ぶ意義や法大生としての自己を見直す初年次教育としての役割を、より強く持つこととなった。

**3 教育方法**

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。

①学生の履修指導をどのように行っていますか。

学生の履修指導は、学部の履修要項と、市ヶ谷リベラルアーツセンター発行の冊子版シラバス（各科目のシラバスの要約を記載した冊子）と、全学共通仕様のWebシラバスで行っている。学部別履修要項の内容については、毎年、学部事務と市ヶ谷リベラルアーツセンター事務で協力し、必要に応じた内容の校正と更新を行っている。シラバス入力項目については、運営委員会において必要な改定を行っている。

全般的な、履修説明を学部ガイダンスで行うと共に、英語分科会では学部ガイダンスの場で独自の履修説明を行っている。また、保健体育分科会では、学部執行部に依頼して学部ガイダンスに必要な事項を反映させて行うケースと、その場において独自に履修説明を追加するケースが共存している。その他、特別なガイダンスが必要な科目においては、各科目担当者が初回の授業内でのガイダンスを行っている（例；自然総合A・B、スポーツ総合演習）。

窓口での履修指導は、各学部窓口と市ヶ谷リベラルアーツセンター事務局が共同して対応している。各科目には、専任教員の科目責任者を配置し、必要に応じて、科目責任者による指導も行う。保健体育分科会では、保健体育課窓口でも履修指導を行っている。

②学生の学習指導をどのように行っていますか。

シラバスにおいて【授業の到達目標】【授業の概要と方法】【テキスト】【参考書】の項目を設定することで、学生の指導方針を明示している。また、個々の教員はオフィスアワーを設定して個別指導を行っている。学部（2015年度より開始予定の人間環境学部を除く）では、低単位取得者・低GPA取得者に対して、面接指導を行っている。面接レベルの設定は、学部が独自に行っている。加えて、分科会単位で行われている特筆すべき学習指導は以下の通り。

- ・自然分科会では「自然総合講座A・B」及び、その他実習を伴う少人数授業では、対面形式でのコミュニケーションを利用して学習指導まで行っている。
- ・情報分科会では、1人1台パソコンを用いた上限50人の演習形式の授業を行い、教員やT・Aが学生1人1人の席を周回して、学生がわからない部分はその場で教える方式で指導して、必要に応じて小テストを行っている。
- ・英語分科会では、必修英語（法・文・経営学部）の履修者を対象とした「大学での英語学習計画」シートを使用し、春学期のはじめと終わり、秋学期の終わりの計3回、同書で学生に質問事項を回答させ、継続的な学習計画を意識させている。また学期末に、「英語選択・総合科目受講の勧め」を配布し、選択・総合科目の履修を促している。
- ・諸語分科会では、より高いレベルの諸外国語を身につけたい学生には、総合科目等の受講を勧め、個別指導を行うこともある。
- ・保健体育分科会では、必修科目のスポーツ総合演習において、生涯にわたり健康を維持増進することの重要性を理解させる目的から、全受講生を対象とした体力測定の実施、ならびにその結果に関するフィードバックを授業内において必修化した。
- ・基礎ゼミ（文学部）では、図書館ガイダンスを実施し、文献の検索・入手・活用の仕方について指導を行っている。
- ・「法政学への招待」（自校教育）では、予習用として独自に編集したテキストを使用し、クリッカーを使った小テスト、リアクションペーパーの翌週授業でのフィードバック、授業支援システム上へ授業の配付資料・小テスト・パワーポイント資料を掲載するなどにより、学生が学習内容を反芻しながら学びを深めることができるよう工夫している。
- ・キャリア教育関連科目では、一方的に教員が講義をするという形式だけではなく、ビデオ教材を利用したり、学生同士のグループディスカッションを取り入れるなどして、学生の理解が深まるようにしている。また、毎回、リアクションペーパーを書かせ、その講義で学んだ内容について自分の意見を述べる機会を設けている。

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するためにどのような方策を行なっていますか。

シラバスにおける【授業外に行うべき学習活動（準備学習等）】を明示することで、学生の学習時間を確保することに努めている。それに加えて、分科会単位で行われている特筆すべき取り組みは、以下の通りである。

- ・情報学分科会では教科書の次の授業内容部分を読んで予習するように指導すると共に、教科書に章末問題などを多めに設け、復習題材としている。
- ・英語分科会では「大学での英語学習計画」シートにより、各自に必要なと思われる学習計画を書かせ、授業の予習・復習のみでなく、授業外の学習時間増加を促進している。

- ・基礎ゼミ（文学部）では、授業支援システムの活用によって、予習・復習時間の確保するように指導している。
- ・キャリア教育関連科目では、調査や発表の目標設定を行う中で、授業外の学習時間の拡大を図っている。

④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。

個別授業における新たな授業形態の導入状況を把握すると共に、学生にもそれが理解されることを目指し、2014年シラバスから、新たに「授業の概要と方法」の欄にPBL（問題または課題解決型授業）・グループワーク・プレゼンテーションの有無を記入項目として設定した。その結果、2014年度のシラバスにおいて延べ239科目が、それらの方法を取り入れていることが判明した。

加えて、分科会単位で行われている特筆すべき取り組みは、以下の通りである。

- ・自然科学分科会では「自然総合講座 A・B」において、班分けすることによってグループで課題に取り組む環境を設定し、アクティブラーニングによる教育効果の向上に努めている。
- ・情報学分科会では、2013年度から「ICTスキル診断テスト」を実施し、結果を分析して授業に反映し、教育効果を向上させている。
- ・英語分科会では、リスニングの自己学習を促すために、インターネット上の無料リスニング教材を紹介するハンドブックを作成し、一部授業内で配布・指導している。また、エッセイライティングの手引きとなるハンドブックを作成し、2014年度の一部の授業では本格的な補助教材として使用している。
- ・基礎ゼミ（文学部）では、高校生を大学生にするべく、主体的な学びの姿勢を修得させるために、プレゼンテーションやディスカッション、グループワークを積極的に採り入れる授業形態にしている。
- ・「法政学への招待」（自校教育）では自分の通う大学について知る新しい科目として、オムニバス形式でその都度適切な講師のキャスティングを行う一方で、常に授業責任者も参加することで、科目としてのつながりを維持できるように努めている。毎回、授業の最後にクリッカーを使った小テストを行い、学習内容を確認させている。更に神宮球場での六大学野球入場券を無料配布し、授業で扱った校歌を、実際に応援の場で歌う機会を提供している。最終回の授業では、グループワーク形式で授業内容に基づいた大学の将来に対する提言を作成し、優秀な提言には総長が賞を与えることで大学に対する貢献の場を提供する。学期末の試験は「法政学検定」とし、合格者すなわち単位取得者には特製の「検定合格証」を授与している。
- ・キャリア教育関連科目では、独自に作成したビデオ教材を用いて、大学で学ぶことが将来の仕事にどう役立っているのかを理解させたり、グループディスカッションでテーマ設定をして意見交換をさせるなど、学生の参加意識を高めるようにしている。また2013年度には就業力を構成するコンピテンシーを測るために独自に開発した測定テスト（HAT）を受講者に対して実施したり、インターンシップの新方式として考案した、企業との提携によるビジネスコンテストへの受講生の参加など、授業の内外で動機付け・スキル取得・スキームの実践を図り、科目の持つ達成指標への到達度向上と同時に指標そのもののレベルアップに役立っている。

3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。

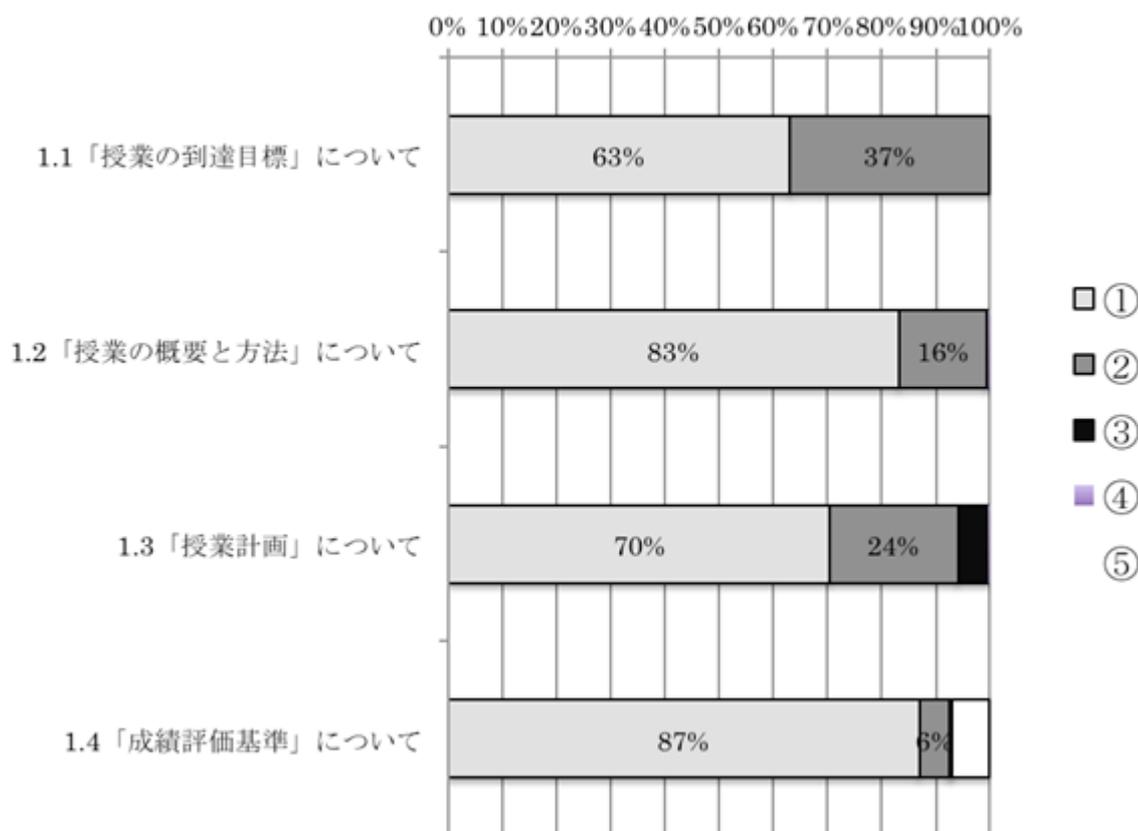
①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。

2012年度より冊子版シラバスに掲載する情報を絞り込み、Webシラバスと合わせて活用することで、学生にとっての利便性が高まるよう努めた。更に、2013年度シラバスからは、所定のフォーマットで記入されていない原稿を事務局でチェックし、必要に応じて教員に訂正を促すことで、適正なシラバス作成が行われるようにした。また2014年度からは、新任教員の記述については各分科会委員長が内容をチェックすることとした。0群「基礎ゼミ」（文学部）、3群「自然総合講座A・B」、5群「スポーツ総合演習」「法政学への招待」（自校教育科目）・キャリア教育関連科目では、運営委員会や担当者全員でシラバスの確認・検証を行っている。

②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。

担当教員に、新年度シラバス入力時に、当該年度の授業シラバスに追加した「(事)後シラバス」項目の入力を依頼し、シラバス各項目の達成度の自己評価を数値化して測定している。その結果、以下のグラフに示すような結果が得られた。

## 2014年度ILAC 後シラバス回答集計



(①ほぼ達成した、②どちらかと言えば達成した、③どちらかと言えば変更した、④変更した)

以上の結果より、ほぼシラバス通りに授業は行われていることが確認された。また、変更したケースについては、その理由が明記され、変更の妥当性も確認された。

2014年度から、法・文・経営学部の英語必修授業については、Webを利用した授業担当者アンケートを実施し、そのアンケートを通じて約12項目の学習要素の実施状況をチェックすることとした。これらの英語授業では、「事後シラバス」の代替として本データを利用して授業項目の検証を行っている。

基礎ゼミ（文学部）では、一部の学科でシラバス達成度の検討会を実施している。

### 3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。

#### ①成績評価と単位認定の適切性をどのように確認していますか。

シラバスに「成績評価基準」を設定し、学生に公開することで公平性を担保している。またセメスター毎に、試験実施方式のアンケートを実施し、個別授業の成績評価法を「平常点・授業内試験・試験・レポート」に大別して把握すると共に、分野別に集計し、運営委員会における審議の後、更に分科会・学部と共有することで、検証を行っている。更に、毎年 GP 分布を分野別・学年別・学部別に解析し、その結果は運営委員会を通じて分科会・学部で共有することで、横断的な成績評価の適切性を検証している。

### 3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

#### ①教育成果の検証を学部・学科ごとに定期的に行っていますか。

毎年授業改善アンケートの「3. 平均予習・復習時間」「4. 授業で身につけたこと」を、科目別・分野別に集計し、運営委員会における審議の後、更に分科会・学部と共有することで、検証を行っている。同様に、卒業生アンケートの分野別の満足度について ILAC として独自の解析を行い、学科単位で比較し、それに対応するカリキュラム上・教育方法上の問題が有るかを検証している。2014年度のデータについては、特に大きな改善点は発見されなかった。

それに加えて、「法政学への招待」（自校教育）およびキャリア教育関連科目では、定期的開催される運営委員会で教育成果の検証を行っている。

#### ②学生による授業改善アンケート結果をどのように組織的に利用していますか。

前年度の授業評価アンケートの各設問について、分野別・科目別に集計し運営委員会において検証すると共に、分科会・

学部と共有することで、更なる検証を促している。更に、各教員にはシラバス入力項目として「学生による授業改善アンケートからの気づき」を設定し、授業改善アンケートに基づく改善内容の公開を義務づけている。ただし、「法政学への招待」（自校教育）では、オムニバス形式であり、平準化して書くことが難しいと思われるため、既成の授業改善アンケートは実施していない。その代わりに、リアクションペーパーを毎回書かせてフィードバックしているほか、学期末試験の際に独自アンケートを実施し、それらを集計・分析して受講学生の現状把握や授業の改善に活用している。そうした受講生の声をまとめて、大学のWEB上で紹介している。

#### 4 成果

4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。

①学生の学習成果をどのように測定していますか。

基本的に、成績評価に基づき学習成果を測定している。3.3に示したように、成績評価の方法について、分野別集計を行う事で、異なる分野間での測定プロセスの違いを把握すると共に、分野毎のG P集計によって、学生の達成度を検証している。更に、授業改善アンケートの「4. 授業で身についたこと」についての分野別集計結果に基づいて、学生の達成感のチェックも行っている。

情報学分科会では、授業開始前の「ICTスキル診断テスト」の導入により、成績評価との比較により伸長度を測ることが可能になった。更に、前年の学習成果（学生満足度）が翌年の応募者数に依存することから、応募者数も成果を示す指標として利用している。また、キャリアデザイン学部の協力を得て、当該学部において「ICTスキル診断テスト」の毎年受験を義務化した。この結果、「ICTスキル診断テスト」データに基づいた、より高いレベルでの教育成果の測定が可能になると考えている。

その他、個別授業においては、学生の事前・中間レポートと最終レポートの比較からの成果の測定や、リアクションシートを利用した成果の確認が行われているケースが多く見られるが、組織的な取り組みには至っていない。

②成績分布、試験放棄（登録と受験の差）などの実績を把握していますか。

前年度の学年別・分野別・科目別・学科別の成績分布を集計し、運営委員会で検討後、分科会・学部と共有することで、成績分布及びEスコア（試験放棄）の割合を検証している。進級判定は、学部教授会が行う事から、市ヶ谷リベラルアーツセンター関連科目の成績と進級との相関性は現時点では把握できていない。しかし、2013年度より実施した、成績データの学部との共有によって、学部との検証データの提供は行われるようになってきている。2014年度は、2010年度入学生4年貫通者の学年別・分野別年間単位取得数の推移を学科毎に集計・グラフ化した。その結果、1年から4年までの、学生の単位取得パターンが学科毎に異なる事が判明した。

加えて、自然科学分科会におけるオムニバス形式授業の「自然総合講座A・B」では、全体的な成績の分布傾向を把握しており、授業間でGPAに偏りがある時には兼任講師も含めた担当教員全体に周知されている。諸語分科会の一部の言語では統一試験を実施することによって市ヶ谷全体の成績分布を把握している。

#### 5 管理運営

5.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。

①センター長をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

ILACは規程に基づき正副センター長・7分科会委員長が置かれ、運営委員会は更に、教育開発支援機構長、6学部の教授会主任、2名の学部長会議代表者を追加したメンバーで構成されている。

更に、様々なプロセスにおいて継続すべき事項は「申し送り事項」として明文化し、それを毎年引き継ぐこととしている。

#### 6 内部質保証

6.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会（質保証委員会等）は適切に活動していますか。

ILACの全体的な質保証活動は、運営委員会で行われている。

分野別の質保証活動は、各分科会及び科目別運営委員会で行われている。加えて、英語分科会では独自の内部質保証委員会を置いている。また、「法政学への招待」・キャリア関連科目・学部別「基礎ゼミ」については、独自の運営組織による質保証が行われている。

授業以外の教育プロセス（履修指導など）の質保証は、学部で行われている。

それらの質保証における必須・オプションのプロセスを項目化し、チェックシートにまとめることで、「質保証の見える化」を行った。

2013年度から「内部質保証委員」を置き、上記の各質保証組織（運営委員会、7分科会、6学部）から提出されたチェックシートの内部監査を行っている。そこで出された、疑問点・改善点の指摘をうけて、各質保証プロセスはその改善を図る。

すなわち、チェックシート項目の設定 (Plan)、チェックシート項目の実施と記入 (Do)、チェックシートの監査 (Check)、それに基づく改善 (Action) のPDCA サイクルで質保証が機能する体制を整えていることになる。

②質保証活動への教員の参加状況を説明してください。

運営委員会は全員参加を原則とし、欠席者には代理の出席を求めている。分科会については、分野別に活動状況にばらつきが有るため、毎月開催される運営委員会で、その活動状況をチェックしている。定期的に会議を開催している分科会・科目運営委員会（情報分科会、自然科学分科会、英語分科会、保健体育分科会、法政学運営委員会、3D 教育システムスタッフ会議）では、ほぼ 100%の専任教員が出席している。また、メーリングリストを利用した会議を行っている分科会（人文科学分科会、社会科学分科会）もあるが、いずれもメール会議によって情報の共有と交換が適切に行われている。

各分科会では、年 1 回兼任教員懇談会を開催し、専任・兼任教員を含めた質保証活動を行っているが、出席率は 10～30%程度である。

質保証委員会は、全員参加（3名の委員と執行部）で行われている。

**現状分析根拠資料一覧**

資料番号	資料名
1 教員・教員組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ILAC ホームページ</li> <li>・ 学科目専任教員の採用手続きに関する申し合わせ</li> </ul>
2 教育課程・教育内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カリキュラム委員会議事メモ</li> <li>・ 教養履修モデルプロジェクト報告書</li> </ul>
3 教育方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カリキュラム委員会議事メモ</li> <li>・ 基礎・総合科目冊子シラバス</li> <li>・ シラバス作成依頼</li> <li>・ 卒業生アンケート・FD アンケート解析資料</li> </ul>
4 成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業評価アンケート解析資料</li> <li>・ 成績分布解析資料</li> </ul>
5 管理運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 機構および ILAC 規程</li> <li>・ 申し合わせ事項</li> </ul>
6 内部質保証	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自己点検評価現状分析シート</li> <li>・ 内部質保証委員会議事メモ</li> </ul>

**III. 重点目標**

昨年度中に各分科会・教授会による大方の合意を取り付けた「カリキュラム・フレームワーク」を基に、既存科目を 100 番台の基盤科目と外国語科目・200 番台のリベラルアーツ科目と外国語科目・300 番台の総合科目（「教養ゼミ」含む）に再配置し、カリキュラムの体系化を具体的に推し進める。それと並行して、2017 年度の新カリキュラム施行を目途に、カリキュラムのより実質的な体系化の方途について検討していく。

そのために、①今年度開かれている・また来年度以降新規開講予定のすべての科目について、上記 3 カテゴリーのいずれに配置するかを兼任講師担当科目も含めて検討する。②各分科会より配置案が出揃った時点で、卒業所要単位数等の再検討を含めて調整を行い、より実質的なカリキュラムの体系化が実現されるよう、科目担当者・分科会委員長と議論を重ねていく。③分科会ごと、あるいは分科会横断的な履修モデルをカリキュラムツリーとして作成し、体系性を可視化する。

**小金井リベラルアーツセンター**

**I 2014 年度の自己評価結果および大学評価委員会の評価結果への対応**

前年度の自己評価については、教育方法、成果、質保証について指摘を受けた。

教育方法および成果については、英語および数学について、成績に関する統計資料の作成および履修動向の調査を行った。それらは、理工学部学生向けの数学系科目のカリキュラム変更およびリメディアル科目の新設のために活用されたほか、英

語教育改善検討プロジェクトにおける議論のための資料として活用された。

シラバスに係する事項については、分科会の活動にまかされたことに加え時間割編成が大幅に遅れたことから、次年度以降に持ち越すこととなった事項も少なくない。

教員組織および質保証については、継続的に取り組むべき課題とする。

## II 現状分析

### 1 教員・教員組織

1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。

①学位授与方針およびカリキュラムを前提とした教員像、教員組織の編制方針を明らかにしていますか。具体的に説明してください。

教員の配置についてはセンターに参加する理工・生命科学部教授会が責任を負うことを「理工学部・生命科学部・小金井リベラルアーツセンター 教養教育に関する申し合わせ」で定めている。(←申し合わせ)

②採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

関係学部において規程が定められている。

③組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。その体制について概要を説明してください。

「理工学部・生命科学部・小金井リベラルアーツセンター 教養教育に関する申し合わせ」において、理工学部・生命科学部教授会および小金井リベラルアーツセンターの3者の責任分掌の基本方針を定めている。(←申し合わせ)

KLAC 規程で、科目群ごとに科目担当者が分科会を構成すること、分科会の代表者が KLAC 運営委員となることを定めている。また、年度初めに、科目担当者に対して、担当者が分科会の構成メンバーであること及び代表者氏名を通知して責任に対する注意を喚起している。(←規程)

1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

①学部・学科のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。また、なぜそのように判断しましたか。

現状では出来る限りの努力をした教員配置がなされていると考えるが、教員が不足している。

教員採用の基準数における別表2 教員枠は理工学部13名、生命科学部5名であるのに対して、教養教育を主として担当する教員の数はそれぞれ11名、2.5名である。また、小金井地区には教職課程担当教員も配置されておらず生命科学部所属の1名は教職課程の運営を主として担当していたため、基準数19名に対して、教養教育を主として担当する教員は13.5名である。(←2014年度学部長会議資料)

②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

教員の新規採用・昇任人事は、KLACに参加する学部の管轄下にあるが、参加学部ならびにKLACの責任分掌を明確化して、参加学部が教員配置に責任を負うことにしている。(←理工学部・生命科学部教授会資料)

1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。

①各種規程は整備されていますか。

専任教員の募集・任免・昇格については、関係学部の責任において行うため該当しない。

兼任教員については「兼任講師の任用基準」を定めている(←兼任講師の任用基準)

②規程の運用は適切に行われていますか。規程に沿った募集・任免・昇格のプロセスを説明してください。

兼任講師については、KLACの申し合わせとして「兼任講師の任用基準」を定め、新規採用の全ての兼任講師の採用において、この基準を満たすことを確認している。(←兼任講師の任用基準)

1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

①部等内のFD活動はどのようになっていますか。

「数学基礎力保証」検討チームにより開催された『「大学・付属校「教育研究連携フォーラム(数学)」(2014年7月26日)』について、間下教授が企画・実行、桂教授が基調講演、磯島准教授が講演を行い全面的に協力した。

### 2 教育課程・教育内容

2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

①幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

小金井リベラルアーツセンターが開講に責任を負う教養科目は、3つの科目群とさらにそれを細分した系に区分されている。すべての学生が履修可能な科目数は以下の通りであり、本項目の目的にかなう教育課程となっている。

また、各系ごとの履修者数(総数および平均)を調査し、一部の系に偏ることなく履修されていることを確認した。

科目区分・科目数		
		科目数
英語科目		6
教養科目	人文・社会	21
	自然科学	9
	保健体育系	5
	選択語学（英語）	6
	選択語学（諸外国語）	20
	リテラシー系	4
理系教養科目	数学系	4
	理科系	12

### ②初年次教育、キャリア教育はどのように展開されていますか。

初年次教育については、科学実験、情報処理技法において実験レポートの書き方、ICT スキルの訓練を行い、上級学年での実験、さらに卒業論文につながる基礎を身につけさせている。（←シラバス）

また、理系教養科目では、高等学校で未履修または理解不足の学生の存在も考慮して、いわゆるリメディアル教育の要素も含めながら、専門教育の基礎固めを行うよう配慮した目標の設定をおこなっている。生命科学部において実施した学生モニターで、高等学校で未履修科目の修得に教養科目が有効であったとの意見が見られた。一方、理工学部の調査では「物理」、「微積分学」の学力の差が1年次終了時点において一部の学生については十分に縮小していないという状況が見られた。

理工学部カリキュラム委員会と協力して、2015年度からリメディアル科目として、「入門数学」、「入門物理学」（1年次春学期開講・各1単位）を理工学部生向けに開講することを決定した。上記2科目は、卒業要件・GPAには算入しない。（←生命科学部学生モニター機構企画委資料、履修の手引）

キャリア教育については、理工学部・生命科学部ともに専門教育の一環としてインターンシップが実施されているが、教養科目としては「キャリアデザイン」を開講し、理系の学生に合わせたキャリアデザイン及び自己啓発の方法を教育している。また「科学技術史」、「先端技術・社会論」、「技術者倫理」、「情報倫理」等の理系学部ならではの科目を開講することで、技術と実社会との繋がりを意識させることによりキャリア教育の一端を担っている。（←シラバス）

学生の健康維持増進・体力強化の意識を高めるために、体育実技の全クラスを対象にして、授業の初めに体力測定（11項目）を実施し現状の基礎体力を把握させることについて検討し、2015年度から実施することとした。（←実施に関する資料）

## 3 教育方法

### 3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。

#### ①学生の履修指導をどのように行っていますか。

「理工学部生のための履修の手引き」「生命科学部生のための履修の手引き」において、科目区分ごとの目標を明示している。とくに英語および選択語学系については14ページにわたる詳細な記述をするとともに担当教員による選択語学ガイダンスを実施している。教養科目の履修については、年度初めに学部全体での共通ガイダンスで、「手引き」を利用して事務部と担当教員が協力して履修指導を行っている。

入学時のガイダンスにかけられる時間が制限されていることから、「手引き」の充実を重要な課題ととらえ、2015年度の「手引き」についても、一部拡充をおこなった。（←履修の手引）

英語科目では1・2年生を対象に実施するTOEICのスコアにより習熟度別クラス編成を実施している。一部の学科では、新入生を対象に実施するプレースメントテストのスコアにより、理系教養科目を能力別クラスにしたり、理解が足りない科目について個別に履修を指導したりする等の工夫を行っている。また、一部の科目については抽選制度を導入して、履修者が教室の定員に応じた適正な数となるようにしている。（←履修の手引、抽選の掲示）

中国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、朝鮮語など諸外国語科目では学生の今後の就職と海外留学などに役立つことを視野に入れて、各言語の検定試験の資格を獲得できるように初級・中級レベルの試験内容の指導を行っていた。多数の合格者がでていた。

#### ②学生の学習指導をどのように行っていますか。

「英語上達への道」を作成して配布し、教養科目として開講される英語科目を中心として、NHKの語学番組、インターネット等を利用して英語力を向上させる方法を解説している。

学生の自発的な学習を誘導するために、TOEIC-IPテストの受験を義務化し、成績の向上が著しい学生にはComprehensive English IIの成績優遇（1段階あげる）を行うほか、525点以上で「英語資格試験準備講座」の単位認定を行っている。（←英語上達への道、履修の手引、）

実験系科目において、DVD教材を使った実験内容のイメージトレーニングを行った後に、実験の詳細を少人数の班に分割

して TA を活用して指導している。このことにより、より効率的できめ細やかな教育が可能になっている。また、レポートの添削指導を行うことにより、レポート作成技術の向上を図っている。(←DVD 教材)

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するためにどのような方策を行なっていますか。

理系教養科目数学系として開講される「微分積分学及び演習 I、II」、「線形代数学及び演習 I、II」の講義内容を統一している。2015 年度から数学教員が執筆した教科書を使用し、演習問題の解答を、授業支援システムを通じて公開する予定である。(←教科書)

科学実験では毎回レポートを課し、レポートに予習・復習の内容を盛り込むことにより、学習時間を確保している。とくに、物理実験では、授業時間内に提出するレポート（自分で考える能力をみる）と一週間後に提出するレポート（じっくり調べて内容を深める）の 2 種類を提出させている。

レポート提出の際に試問を行うほか、一部の科目では学期末に試験を行なうことにより、知識の定着の確認を行っている。これらは、学習時間の増加にも有効に機能している。

実験科目の運営について、実験開始前に TA に対する指導を行って危険の防止および指導体制の充実を図っているほか、学期末に独自のアンケート調査をおこなっている。(←資料科学実験アンケート 2014 秋まとめ、科学実験アンケート 2014 春まとめ)

④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。

SA プログラムの単位認定を、教養科目の「科学技術コミュニケーション演習」として行っている。

学生の英語の能力向上の要求にこたえるため、英語教育改善検討プロジェクトを設置して議論を開始し、改善の方向性を定めた。(←プロジェクト資料)

また、理工系学生の基礎学力となる数学および実験についても改善の努力をおこなっている。

数学については、理工学部カリキュラム委員会と協力して、理工学部生向けの数学系カリキュラムの改善を行った。(←理工学部履修の手引)

科学実験において、自分の考えを話す・他人の考えを聞く能力の育成を目標として、実験終了後の簡易レポート作成前に、TA と同テーマの実験者として結果や内容についてのグループディスカッションを行っていること等が従来型の座学重視の授業形態とことなる点としてあげられる。

3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。

①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。

理系教養科目数学系および自然科学実験については、シラバスを統一して担当教員によらずに、すべての学生が最低限必要な事項を学べるように配慮している。(←シラバス)

また英語科目・諸外国語科目については、毎年科目を決めてシラバスの内容を専任教員がチェックを行なうこととして、2014 年度は、アカデミックリーディング 19 クラスについてチェックを行った。(←チェック表)

②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。

英語科目・諸外国語科目については授業打ち合わせ会を実施している。

専任および兼任を含めた担当教員同士の日常的な業務連絡において授業の進捗が話題になることも多く、授業打ち合わせや、日常的な業務連絡において検証がなされていることを確認した。

数学系科目についてはシラバスの改訂を行い、2015 年度から実施するため、授業の内容量が妥当であるかの判断の意味を含めて、2015 年度にシラバスの内容がどの程度に消化できたかのアンケートを行なうこととして様式の検討を行った。

3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。

①成績評価と単位認定の適切性をどのように確認していますか。

理工学部・生命科学部ともに、各学期末に学生が、成績評価について調査申請を行うことが制度化されている。教養教育に関する調査では、担当教員からの回答を KLAC センター長が確認することとしている。(←調査申請書式、申請件数)

理系教養科目数学系では、1 学科の学生を複数のクラスに分けて授業を行う場合、1 学科を 1 名の教員が担当するように時間割編成を行い、1 学科を複数の教員が担当する場合には成績の比率の調整を行っている。(←時間割)

2014 年度秋学期は、応用情報工科学科生向けの「微分積分学及び演習 II」の期末試験を統一試験として実施した。統一シラバスで授業を実施し、統一問題で試験を実施したにも関わらず、平均点に 10 点程度の差が発生した。他の科目においても、同様の問題が発生することも報告されており、100 名程度の集団では 2 分割したクラスの成績に差が発生して、成績評価の公平性の確保の難しさが改めて示される結果となった。

英語科目については、必修に指定されている各科目について学科ごとの GPACA を算出し、英語教育改善プロジェクトおよび担当教員間での検討のための資料として提供した。担当教員間での検討結果は、履修の手引に反映された。(←履修の手引)

3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

①教育成果の検証を学部・学科ごとに定期的に行っていますか。

入学時、1年次の12月および2年次の12月に在学生全員を対象にしたTOEICの試験を実施し、英語科目の習熟度別クラスの運営に活用している。(←履修の手引)

入学時に行うプレースメントテスト・理系教養科目(数学・物理)の成績の推移を、入試経路別に調査し、高大連携の議論等に活用している。この調査結果からリメディアル科目設置の必要性が認識され、理工学部における「入門数学」、「入門物理学」を設置することとなった。(←教授会資料、理工学部履修の手引)

2014年度は、数学系教養科目の改善のために、数学系教養科目の不合格者数と履修動向の調査を行った。この資料から不合格者の履修動向が浮き彫りとなって一部の数学系科目の必修化に必要性が確認され、2015年度から春学期開講の理工学部生向け数学系教養科目を必修化することとなった。(←数学の調査)

FD推進センターと協議して、FD推進センターから必要な生データの提供を受けられるようにした。さらに、提供されたデータをもとにした教育成果の検証方法についての検討を開始した。提供されたデータの解析結果の利用については3.1に詳述した。

②学生による授業改善アンケート結果をどのように組織的に利用していますか。

各教員に対してFD推進センターから授業改善アンケートの結果が送付されている。

学生の自由記述について、センター長が確認しているほか、理工学部では回答した学生のGPA値と対比できる形で各教員にフィードバックされている。

#### 4 成果

##### 4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。

①学生の学習成果をどのように測定していますか。

各科目ともにレポート・定期試験等で測定している

科学実験においては、レポートに重点をおいて測定しているが、試問による実験背景・実験内容の理解度、到達度の測定も行っている。

教養科目に限るものではないが、理工学部・生命科学部ともに、定期試験では十分な試験監督者の配置と厳格な運用により不正行為を防止する体制が作られている。(←試験実施時間割等)

②成績分布、試験放棄(登録と受験の差)などの実績を把握していますか。

FD推進センターにおいてKLACについてもGP平均が算出されている。

さらに、FD推進センターおよび小金井事務部から提供されたデータをもとに、KLAC独自の分析を開始している。

英語の必修科目については、科目ごとに各標語(A+、A、…、D)の比率を算出して英語教育改善検討プロジェクトおよび英語担当教員による検討の資料とした。

数学系教養科目「微分積分学及び演習I」「線形代数学及び演習I」について、2013年度1年生の不合格「D」および履修放棄「E」の学生数の調査と2014年度2年生の自然系教養科目の履修申告の総数の調査を合わせて行った結果、多くの学生が数学の履修から逃避している状況が明らかになった。

この調査をもとに、理工学部カリキュラム委員会と協力して、数学系教養科目「微分積分学及び演習I」「線形代数学及び演習I」の必修化を行った。

#### 5 管理運営

##### 5.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。

①センター長をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

センター長、副センター長を設置し、この任免を含めセンターの規程により適正に運用している。

#### 6 内部質保証

##### 6.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会(質保証委員会等)は適切に活動していますか。

現状ではKLAC運営委員会が質保証委員会を兼ねているが、これは当センターの規模によるものである。次年度以降の質保証委員会のあり方について議論を開始した。

2014年度は、KLAC運営委員会を5回開催し、この中で質保証に関する議論も行った。(←議事メモ)

②質保証活動への教員の参加状況を説明してください。

教養科目を担当する専任教員は、担当する科目区分に対応する分科会の構成メンバーとなり、分科会から選出された代表者がKLAC運営委員会メンバーとなるのが規程によって定められている。このようなシステムの下で、教養教育に関して発生する諸問題はKLAC運営委員会での検討に反映され、質保証活動がなされている。(←議事メモ)

現状分析根拠資料一覧	
資料番号	資料名
1 教員・教員組織	
1.1①③	「理工学部・生命科学部・小金井リベラルアーツセンター 教養教育に関する申し合わせ」
1.1③	KLAC 規程
1.2①	2014 年度学部長会議資料
1.2②	教養教育を主として担当する教員（リスト）※理工学部・生命科学部教授会資料
1.3①②	「兼任講師の任用基準」
2 教育課程・教育内容	
2.1②	シラバス、生命科学部学生モニター機構企画資料、履修の手引き、実施に関する資料
3 教育方法	
3.1①	履修の手引き、履修の手引き（抽選に関する資料）、諸外国語根拠資料
3.1②	英語上達への道、履修の手引き、DVD 資料
3.1③	教科書、資料科学実験アンケート 2014 秋まとめ、科学実験アンケート 2014 春まとめ
3.1④	プロジェクト資料、理工学部履修の手引き
3.2①	シラバス（Web）、シラバスチェック結果
3.3①	調査申請書式、申請件数、時間割、履修の手引き
3.4①	履修の手引き、教授会資料、理工学部履修の手引き、数学の調査
4 成果	
4.1①	学習成果、試験実施時間割等、英語教育検討プロジェクト検討資料、数学の必修化資料
6 内部質保証	
6.1①	内部質保証議事メモ

### III. 重点目標

国際化に対応できる英語力の強化、理系基礎科目の点検・強化を重点目標とする。

### 学習環境支援センター

#### I 2014 年度大学評価委員会の評価結果への対応

2014 年度大学委評価委員会からは『総評』として、「学習環境支援センターは、(中略)学生の学習環境をより効果的にサポートするネットワーク構築を目指している。とくに、ここ数年校舎建て替え工事に伴う学習環境への影響について特段の配慮が必要であり、関係部局との適切な調整が実施されることを期待したい」とのご意見を頂いている。とりわけ「校舎建て替え工事に伴う学習環境の影響について特段の配慮」が求められていることから、2015 年度においては以下「II 現状分析」に示されている通り、緊密な部局間連携を主導しつつ「ゾーニング（施設機能の集約化）」のあり方を引き続き検討していく予定である。これにより、工事に伴う悪影響を軽減させるとともに、学生に対し出来る限り効率的な支援サービスが施されるような「部局間相互連携の創意工夫」をハード・ソフト両面の具体策に引き上げていきたい。

### II 現状分析

#### 1 教育研究等環境

1.1 教育研究等を支援する環境や条件は適切に整備されているか。

①学生の主体的な学習を支援するためにどのような取り組みを行なっていますか。

「学習環境」の定義及び役割の明確化と情報の共有化のため、各部局からの学内施設利用状況報告書の書式の改善を行い、委員会における報告を継続している。

2014 年度における LE センターの特記すべき主な活動は、以下の二点に集約される。一つはハード面（学習環境施設）の整備主導であり、もう一つはソフト面（学生による主体的相互学習の枠組み）のシステム構築である。

第一に、キャンパス内における「ゾーニング（施設機能の集約化）」である（ハード面）。2014 年度は「アクティブラーニング」機能施設のゾーニングを図る観点から、その中核となる新施設（ボアソナードタワー3 階）の設置を主導し、大学施設部等との学内内部局連携のもと、2015 年 4 月からの開設を実現させた。また、LE センターは開設後の監理運営についても、引き続き部局間連携によって主導していく体制を整えている。

第二に、学生の正課外活動等における「ピアネット（相互学習のネットワーク化）」支援である（ソフト面）。ピアネッ

ト活動については、学生の多様な正課外活動の実施のみならず、情報システムを活用しつつその活動実態を記録する（e-ポートフォリオの活用）とともに、活動そのものの評価についても、評価基準を具体的に例示する（ピアネットコンピテンシーの明文化）など、正課外活動の導入、監理、評価全ての段階で一定の成果を得た。

## 2 管理運営

2.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。

①センター長をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

規定に基づき学習環境支援センター運営委員会を10回開催、ピアネット実行委員会は1回開催し、相互検証、評価を行っている。

## 3 内部質保証

3.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会（質保証委員会等）は適切に活動していますか。

学習環境支援センター運営委員会では学習環境支援を担う各事務部局より委員を選出し、また、教育開発支援機構長、3キャンパスの図書館長・副館長から1名に加え、関係教員も参加することが可能である。こうした体制構築を通じて、「単位の実質化」の観点から教育・学習環境整備、正課外での学生の主体的学習支援のあり方について、各運営委員会委員が相互に評価・検証を行うことで内部質保証を担保している。さらに現在では、ソフト面での学習環境整備の強化に向け、センターの下に「正課外教育プロジェクト」を設置（2012年度～）し、各キャンパスの教員と関連部局（学生センター、キャリアセンター、学務部）の職員がメンバーとして加わり、学術的な見地からも内部質保証を行う事としている。

学習環境支援センター運営委員会は2014年度10回開催し、事業内容（質保証）についての検討を行っている。また、教育開発支援機構企画委員会は、学習環境支援センターを含む4センターのセンター長がメンバーとなっており、それぞれのセンターの施策について相互検証、評価する体制となっている。また、同企画委員会には指名委員として3キャンパスの教員もメンバーとして入っており、さらなる内部質保証を実現している。同企画委員会は2014年度10回開催され、毎回学習環境支援センター長が出席して活動報告を行い、相互検証、評価を行っている。

②質保証活動への教員の参加状況を説明してください。

学習環境支援センター運営委員会への教員の参加状況は、センター長、教育開発支援機構長のほか運営委員として3キャンパス図書館長・副館長から1名、学習ステーション長、プロジェクトリーダーがメンバーとして参加する。その他必要に応じて総合情報センター教員、FD推進センタープロジェクトリーダーが参加している。また、「正課外教育プロジェクト」では、主にソフト面の検討を行うため学習ステーション運営委員の教員を中心に、事案に応じて各キャンパスの教員に参加いただき、意見を求めている。

### 現状分析根拠資料一覧

資料番号	資料名
1 教育研究等環境	・各部局からの学内施設利用状況報告、ピア・ラーニングスペース概要
2 管理運営	・学習環境支援センター規程（規定第1031号） ・法政大学ピア・ネット規程（規定第1114号）
3 内部質保証	・ピア・ネットガイド（2014年度版）

### Ⅲ. 重点目標

特に重視する目標は、学習環境支援に関係する部局職員による「相互連携の創意工夫」である。現場における環境支援策については、大学の上位意思決定機関によるリーダーシップもさることながら、きめ細かな現場レベルでの判断と多様な学生ニーズに寄り添った創意工夫が特に要求される。これらのアイデアがトップダウンではなく、個別の部局職員から自由闊達なボトムアップで引き出されていくような、会議体の運営・組織作りを目指す。そのため、運営委員会で現在行っている「各部局からの活動報告」の内容と審議のあり方について、現在「現状の稼働状況報告」に係るウエイトを置いているところを、「学生の学習環境ニーズに対する改善アイデア提案」にシフトさせていく工夫を試みたい。

### Ⅳ 2014年度目標達成状況

No	評価基準	教員・教員組織（FD推進センター）
----	------	-------------------

1	中期目標	「自由と進歩」の建学の精神に基づく教育理念と教育目標を達成するためになされる、教育および学びの質の向上に向けた全学的な教育支援施策の企画・開発・推進、FDの推進と各教学組織におけるFD活動の支援を行う。
	年度目標	<p>①FD推進センターの運営を円滑に行うため、プロジェクトリーダー会議を定期的に開催する。</p> <p>②「学生による授業改善アンケート」のWeb上での実施に取り組む。</p> <p>③「学生による授業改善アンケート」およびGPCA全学GPの集計結果を参考にし、教育の質的向上に向けた提案を行う。</p> <p>④「学生による授業改善アンケート」の内容（質問項目等）の点検・検討の作業を開始する。</p> <p>⑤学内の関連組織と連携し、シンポジウム・フォーラム・新任教員FDセミナー・ワークショップ・ミーティングを開催する。</p> <p>⑥アドバイザー・ボード会議を開催し、学内におけるFDに関するニーズを把握し、学内の各教学組織が主体となったFD事業の推進をめざす。</p> <p>⑦「授業支援システム」の活用・運営に関する情報収集を行い、問題点や改善点の有無を点検する。</p> <p>⑧大学間連携によるFDプロジェクトに参加し、情報収集を行う。「FD学生の声コンクール」の充実をはじめ、学生参加型FDへの取り組みを強化する。</p> <p>⑨教育の質的向上に資する教育方法および教育ツールについて情報収集を行い、情報提供を行う。</p>
	達成指標	<p>①プロジェクトリーダー会議を月例で年10回開催する。</p> <p>②秋学期より「学生による授業改善アンケート」をWeb上で実施する。集計結果等への影響についての検討を始める。</p> <p>③「学生による授業改善アンケート」およびGPCA全学GPの全学集計結果を作成し、学部長会議に報告する。</p> <p>④「学生による授業改善アンケート」の内容（質問項目等）の点検・検討をプロジェクトリーダー会議において行い、アドバイザー・ボード会議において意見を聴取する。</p> <p>⑤シンポジウム・フォーラムを年1回、新任教員FDセミナーを1回、ワークショップ・ミーティングを各2回開催する。</p> <p>⑥アドバイザー・ボード会議を3回開催する。『法政大学教育研究』を作成し、「FDニューズレター」を6号以上発行する。</p> <p>⑦授業支援システム運営委員会を3回以上開催する。</p> <p>⑧全国私立大学FD連携フォーラム、関東圏FD連絡会に参加する。「FD学生の声コンクール」への応募数の増加をめざす。</p> <p>⑨学内外で活用されている教育方法および教育ツールについて情報収集し、学部長会議やFD推進センターWebサイト等を通じて学内に情報提供する。</p>
年度末報告	<p>自己評価 A</p> <p>理由</p> <p>①プロジェクトリーダー会議を月例で年10回開催した。</p> <p>②秋学期より「学生による授業改善アンケート」をWeb上で実施した。集計結果等への影響について検討を始めた。</p> <p>③2013年度秋学期、2014年度春学期の「学生による授業改善アンケート」およびGPCAの全学集計結果を作成し、学部長会議に報告した。</p> <p>④「学生による授業改善アンケート」の内容（質問項目等）の点検・検討については、次年度の優先課題とする。</p> <p>⑤シンポジウム・フォーラムを年1回、新任教員FDセミナーを1回、ワークショップ・ミーティングを各2回開催した。</p> <p>⑥アドバイザー・ボード会議を3回開催した。『法政大学教育研究』を作成し、「FD推進センターNewsletter」を創刊し、第8号まで発行した。</p> <p>⑦システム上の大きな課題がなかったため授業支援システム運営委員会は1回のみ開催となったが、毎月授業支援システム運用会議及び委託業者との定例会議を開催し、授業支援システムの活用・運営に関する検討を実施し、改善を行った。</p> <p>⑧全国私立大学FD連携フォーラム、関東圏FD連絡会に参加した。「FD学生の声コンクール」</p>	

			への応募数を若干増やすことができた。 ⑨学内外で活用されている教育方法および教育ツールについて情報収集し、学内への情報提供を行った。 なお、シラバスの項目改訂と入稿ガイドラインの策定を行った。
		改善策	②授業改善アンケート Web 化の影響を検討し、改善のための具体的な提案を学部長会議等に行う。 ⑦授業支援システムの改善に向けた検討を引き続き実施する。
No		評価基準	教育課程・教育内容（市ヶ谷リベラルアーツセンター）
2		中期目標	2017 年度を目途に新しいカリキュラムを導入する中で、法政大学の教育課程の編成・実施方針に基づいた市ヶ谷リベラルアーツ教育カリキュラム体系の再構築を行う。
		年度目標	①学生の履修傾向の分析と、新カリキュラムの科目構成の検討が ILAC の中で組織的に行われるようにする。 ②上記①におけるカリキュラム改革の進捗状況が、兼任講師まで含めたメンバー全員で情報共有できるようにする。
		達成指標	①ILAC 運営委員会の中に「カリキュラム委員会」を設置し、定期的開催する。 ②上記「カリキュラム委員会」から、情報を発信する「ニュースレター」を発行し、その配信の仕組みを作る。
	年度末報告	自己評価	S
		理由	①カリキュラム委員会を設置し定期的に開催した。その議事録を ILAC 運営委員会に提示した。 ②カリキュラム委員会「ニュースレター」を発行し、カリキュラム改革の進捗状況を広報した。
改善策		—	
No		評価基準	教育課程・教育内容（小金井リベラルアーツセンター）
3		中期目標	関係学部専門教育との関係に十分注意を払いつつ、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行うとともに実施体制の強化を行う。
		年度目標	①教養教育の目標についての議論、リベラルアーツセンターと関係学部の協力体制・責任分担についての議論を継続するとともに、教養教育の実施体制の強化をめざす。 ② （イ） 関係学部と協力して入学前教育、初年次教育の問題点の点検を行い、理系教養教育の改善に反映させる。 （ロ） 国際化に対応できる英語力充実の方法を検討する。 （ハ） 基礎教育としての理系教養教育の点検・充実・改善を行う
		達成指標	①KLAC 運営委員会、各分科会およびセンターのプロジェクトにおける議論を指標とする。 ②以下の項目の達成状況を指標とする。 （イ） 入学前教育・初年次教育における KLAC の役割の明確化、プレースメントテスト・入学前教育・チューターを活用した理系教養科目の充実。 （ロ） 関係学部と英語教育のカリキュラムおよび実施方法について検討し 2015 年度から実施する。 （ハ） 理系教養科目の講義内容の点検、科学実験の実施体制の点検、高等学校学習指導要領改訂への対応。
	年度末報告	自己評価	A
		理由	各分科会での活発な議論をもとに、②の各項目について以下の成果があった。（イ）理工学部カリキュラム委員会と協力して、リメディアル科目「入門数学」、「入門物理学」の 2015 年度新設を決定した。（ロ）英語教育改善検討プロジェクトを設置して議論を開始し、改善の方向性を定めた。（ハ）高等学校学習指導要領の改訂に合わせて数学系科目の教育内容の検討を行い、新しいシラバスに対応する教科書の執筆作業を行った。また、科学実験の実施体制の見直しも行った。
改善策		教養教育を担う教員（特に理系）が不足する状況下で、KLAC と学部との連携を深める必要がある。入学前教育、プレースメントテストの理系教養教育への活用を進めること、英語教育改善検討プロジェクトの議論を加速することも必要である。	

No	評価基準	教育方法（市ヶ谷リベラルアーツセンター）	
4	中期目標	市ヶ谷リベラルアーツ教育のカリキュラム体系において教育効果を最大限に発揮するために、履修指導体制を整備する。	
	年度目標	①新しいカリキュラムについて、履修の指針の提示を可能にする。 ②上記「履修モデル」と合わせた履修指導の体制について、(1) 現行の履修指導体制を検証する (2) 改善を検討するスキームを策定することで再構築が可能な状態にする。	
	達成指標	①-1 「教養履修モデル構築プロジェクト」を立ち上げる。 ①-2 上記プロジェクトで「履修モデル」を5種類程度作成する。 ①-3 「履修モデル」に基づき、既存・新規開講予定の授業科目の選択の指針を作成する。 ②-1 各学部窓口での基礎科目の質疑応答例を集約する。 ②-2 上記の集約を活用し、学部ごとの履修指導体制の比較検証が可能なデータを作成する。 ②-3 （必要に応じて）他大学の履修指導体制を調査する。	
	年度末報告	自己評価	A
		理由	①教養履修モデルプロジェクトを設置、4回の会議を開催し、報告書として11例の履修モデルの例をILAC運営委員会に提示した。 ②学部窓口対応の事例をデータ化しILAC運営委員会で共有した。 質保証のチェックシートに、学部ごとの学習指導体制を記載する項目を設定し、それぞれの指導体制を明確化することとした。 学部ごとに4年間を通じての教養科目単位取得状況をデータ化し、学部の履修指導の一助とした。
改善策		—	
No	評価基準	成果（市ヶ谷リベラルアーツセンター）	
5	中期目標	教育目標の達成度を検証するために、成績評価の解析・検証を深化させると共に、担当教員の自己評価を加味することが、システム構築によって可能な状態にする。	
	年度目標	①客観的なデータに基づく科目・分野別の解析・検証が、教員間で共有できるようにする。 ②教員自身による授業目標達成の自己評価が、システムを利用して標準的に行われるようにする。	
	達成指標	①GPCAによる科目・分野別の解析用データを作成する。 ②2013年度に策定した「後シラバス」について、各教員による入力を今期より行う。	
	年度末報告	自己評価	S
		理由	①GPCAを、分野別・学部別・学科別に集計し、ILAC運営委員会でデータの共有をした。 上記等のデータの効率的な共有環境として、デスクネットを導入し、専任教員全員のアクセスを可能とした。 ②「後シラバス」入力システムを開発し、入力を開始した。
改善策		—	
No	評価基準	成果（小金井リベラルアーツセンター）	
6	中期目標	教育の成果を測定するために必要となる指標を開発し教育の改善に活用する。	
	年度目標	教育の効果を測定するための指標について検討してデータの収集を行うとともに、その活用方法についても検討する。	
	達成指標	教養教育の区分ごとのGP平均や、理系教養科目の入試経路別GP平均の推移の調査、およびその教養教育の改善へのフィードバックで評価する。	
	年度末報告	自己評価	A
		理由	理工学部カリキュラム委員会と協力して、理工学部生向けの数学系科目のカリキュラム変更を行った。その検討のために作成した成績分布や履修動向についての様々な資料が、検討の過程で有効に活用された。また、前年度から行っている、プレースメントテスト、入学後の数学及び物理学の入試経路別の成績調査の結果から、リメディアル教育の必要性が理解され理工学部生向けのリメディアル科目「入門数学」、「入門物理学」が設置されることとなった。
改善策		今年度理工学部カリキュラム委員会と共同して行った数学系教養科目のカリキュラム変更の効果の検証、数学以外の科目についても実施体制の強化の検討が必要である。	

No	評価基準	教育研究等環境（市ヶ谷リベラルアーツセンター）	
7	中期目標	時間割体系の構築により教室資源が最大限に活用される状態にし、履修登録システムの見直しにより適正受講者数を維持できるようにする。（ILAC）	
	年度目標	①現在の時間割配置と履修者数のデータの共有により、問題点の発見ができるようにする。 ②春秋 Semester 単位の履修登録が可能なシステムの策定と、その導入上の課題が判るようにする。 ③教室定員の遵守を可能にするために、現行の課題と解決方法を明らかにする。	
	達成指標	①時限毎の登録者数を解析するためのデータを作成する。 ②履修システムの技術的問題の検討と、解決方法（案）を提示する。 ③履修者抽選制（教室定員に基づく）の導入について、技術的検証結果を出す。	
	年度末報告	自己評価	A
		理由	①時限・曜日別の登録者数のデータを作成し、ILAC 運営委員会で共有した。 ②春秋 Semester における様々な履修の方法について ILAC 運営委員会で検討した。 ③抽選制に向け、現在の教室定員超過授業についてデータ化した。その結果、抽選制の導入した場合の対象授業は約 30 コマ程度であることが確認された。
改善策		—	
No	評価基準	教育研究等環境（学習環境支援センター）	
8	中期目標	教育および学びの質の向上を促進するため、学内の各施設・部署と連携して学生が利用しやすい学習環境を整備し、単位制度の実質化の観点から、さらなる教育・学習環境の整備と学生の主体的学習の支援のための全学的な施策の企画・提案・調整を行う。	
	年度目標	・学生目線による共通機能のワンストップ化と 55・58 年館建替工事影響緩和のためのゾーニングについて検討する。 ・学生の学習環境整備に関わる学内関係各部署それぞれの予算及び人員、年間業務フロー、アウトソーシングを含む実施体制、業務を通じて得られる諸情報の収集・分析及び企画立案機能、改善が望まれる課題等の現状と方向性についてきめ細かく把握する。 ・学生による主体的学習のサポートを目的とした、相互の連携強化や相乗効果を引き出すための「センター機能のあり方」について検討する。 ・ピア・ネット活動の活性化のために、ピア・ネット運営委員会等の各種委員会と協力し、正課外教育の視点からの環境整備と施策を実施する。 ・学習ステーションの活性化と情報発信を強化し、他部局と連携したプログラムを実施する。	
	達成指標	・学生目線での学習施設のゾーニングについて、方法やビジョンのあり方等について検討する。また、学習環境の向上に資する具体的な部局間連携対策が現場レベルで実現可能なケースにおいては、その意義や有効性を広く関係部局に周知させる学内ネットワークのあり方についても検討し、そのフィージビリティ（実現可能性）を担保する体制を整える（LE センター運営委員会におけるプロジェクト運営機能の強化など）。 ・学習環境施設について、関連部局連携の現状を把握し、併せて「センター機能のあり方」について検討する。 ・各種アンケートへの対応を通じ、学習環境に関する情報を収集し、関係部局による対応結果についての情報を発信する。 ・ピア・ネット活動の活性化について、「ピア・ネット運営委員会」、「正課外教育プロジェクト」等と連携し、情報共有や連携強化の支援を行う。 ・G ラウンジプログラムの運営について、ピアサポートの仕組みを使ったプログラムを「正課外教育プロジェクト」で検討、実施する。 ・学習ステーションのプログラムの充実化と情報発信の仕組みの強化を行う。	
	年度末報告	自己評価	A
理由		・「アクティブラーニング」のゾーニングを図る観点から、その中核施設となる新施設（ボアソナータワー3 階）の設置を主導し、2015 年 4 月からの開設を実現させた。LE センターが、新施設の関連部局間で調整を果たすとともに積極的な連携を主導し、開設後の運営についても、LE センターが監理していく体制を整えた。	

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記の「アクティブラーニング新施設」の設置において、LE センターは関連部局に対する「コーディネート機能」及び、開設後の「マネジメント機能」の両立を果たす形となった（「センター機能のあり方」を検討する上での、先進的なケースとなった）。</li> <li>・各種学生アンケートへの対応についても、学生ニーズを結果から汲み取り、関係部局への照会とともに改善策等を取りまとめ、学生に対してフィードバックを行っている。また、その内容についても、運営委員会において議論を行い、然るべきあり方についてその都度チェックしている。こうした対応は、既にセンターのルーティン業務である。</li> <li>・ピアネット活動については、学生の多様な正課外活動の実施に加え、その活動実態を記録及び評価基準を具体的に例示する（ピアネットコンピテンシーの明文化）などを検討し、一定の成果を得た。</li> <li>・学内プロジェクト間での連携（正課外教育及びグローバル教育）が進められている。</li> <li>・学習ステーションプログラムの上記「アクティブラーニング新施設」への展開や関連部局のゾーニングを図るとともに、これまで市ヶ谷キャンパスで実施されていた同ステーションの諸活動を小金井キャンパスへ広げる可能性を検討した。（関連部局との話し合いを開始した。）</li> </ul>	
	改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「アクティブラーニング新施設」の監理運営についての具体的な「ガイドライン」を設定する。</li> <li>・「センター機能」としての「コーディネート機能」と「マネジメント機能」について、今年度は「アクティブラーニング新施設」の開設をケースとして検討してきたが、今後は他の様々な施設の多様性とゾーニングの際の留意事項等を踏まえ、センター機能のあり方を引き続き検討し、一定の類型化を試みる。</li> <li>・学生ニーズの対応については、予算的制約の有無を考慮しつつ、各個別ニーズへの対応のあり方を検討していく。</li> <li>・ピアネット活動については、特に活動管理（eポートフォリオ）と活動評価（ピアネットコンピテンシー）について、情報システムを活用したしくみを検討しつつ、正課外活動の導入、監理、評価全ての段階で運用実態を継続的にフォローし、改善事項等について検討を深めていく。</li> <li>・各関係部局におけるプロジェクトの実態をさらにきめ細かく把握し、連携が必要な場合において、速やかにそれを主導していく体制づくりを検討する。</li> <li>・「アクティブラーニング新施設」の活性化について、に学習ステーションと連携しながら具体的な方策を検討する。</li> <li>・小金井における正課外教育活動の活性化について、引き続き検討を進める。</li> </ul>	
No	評価基準	内部質保証（市ヶ谷リベラルアーツセンター）	
9	中期目標	市ヶ谷リベラルアーツ教育のカリキュラム体系が適切に機能しているかを、全ての分科会において同一基準で分析して、全体の質保証が行われる状態にする。	
	年度目標	ILAC の内部質保証について、前年度より質的に向上させる。	
	達成指標	2013 年度に策定した「質保証チェックシート」のフォーマットの改善を行う。	
	年度末報告	自己評価	S
		理由	質保証のチェックシートを大幅に改善し、質保証の PDCA サイクルを確立した。（P：チェック項目と対応法の決定、D：実行、C：チェックシート記入、A：質保証委員会提言に基づく改善）
改善策		－	

#### V 2015 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教員・教員組織（FD 推進センター）
1	中期目標	「自由と進歩」の建学の精神に基づく教育理念と教育目標を達成するためになされる、教育および学びの質の向上に向けた全学的な教育支援施策の企画・開発・推進、FD の推進と各教学組織における FD 活動の支援を行う。
	年度目標	教育及び学びの質の向上に向けた全学的な教育支援施策の企画・開発、FD の推進と各学部等の FD 活動の支援を行う。 ①FD 推進センターの組織運営を引き続き活性化させるために、プロジェクト・リーダー会議を定期的

		<p>に開催し、質の向上をはかる。また、アドバイザー・ボード会議を開催し、学内における FD に関するニーズを把握し、学内の各教学組織が主体となった FD 事業の推進をめざす。</p> <p>②「学生による授業改善アンケート」について、2014 年度秋学期から Web 方式に変更したが、回答率を引き上げるため、現状分析をおこなったうえ、策を講じる。また、アンケートの質問項目について、2015 年度秋学期より変更を行う。</p> <p>③2014 年度秋学期に、Web シラバスの項目改定およびガイドラインの作成を実現させたが、その後の利用者の状況調査を行う。</p> <p>④授業改善アンケートの結果・分析を掲載している FD ニュースレター冊子について、当年度分までの発行を行う。また、2014 年度秋学期に「学生による授業改善アンケート」を Web 化したことに伴い、マークシート方式との比較検討を行う。</p> <p>⑤「学生による授業改善アンケート」および GPCA 全学 GP の集計結果を参考にし、教育の質的向上に向けた提案を行う。</p> <p>⑥教育および学びの質の向上を目的とし、すべての教員が使える教育方法および教育支援ツールの展開を行う。</p> <p>⑦学内の関連組織と連携し、シンポジウム・フォーラム・新任教員 FD セミナー・ワークショップ・ミーティング等を開催する。また、学外組織とも連携し、最新の教育情報の収集に努める。</p> <p>⑧学生 FD スタッフ活動を支援する(学生が選ぶベストティーチャー賞の活動等)。</p> <p>⑨FD 活動とその意義について、学内での認知度を高め、授業改善に役立つ情報や資料を提供する。</p> <p>⑩学生に対して、学習支援関連の情報を提供するとともに、コンクールを通じて FD に対する関心を喚起する。</p> <p>⑪「授業支援システム」の活用・運営に関する情報収集を行い、問題点や改善点の有無を点検する。</p>
	達成指標	<p>①プロジェクトリーダー会議を月例で年 10 回開催する。アドバイザー・ボード会議を 3 回開催する。</p> <p>②2014 年度秋学期の授業改善アンケートの分析を行い、2015 年度春学期に、回答率を向上させる。また「学生による授業改善アンケート」の内容(質問項目等)の点検・検討を行い、学部長会議に提案する。</p> <p>③調査結果を学部長会議に報告する。</p> <p>④FD ニュースレター冊子を 2015 年度春学期分まで発行を完了する。</p> <p>⑤「学生による授業改善アンケート」および GPCA 全学 GP の全学集計結果を作成し、学部長会議に報告する。</p> <p>⑥学内外で活用されている教育方法および教育ツールについて情報収集し、学部長会議や FD 推進センター Web サイト等を通じて学内に情報提供する。</p> <p>⑦年間で、フォーラムを 1 回、新任教員 FD セミナーを 1 回、ワークショップを 1 回、ミーティングを 1 回開催する。また、大学の SGU 動向にもあわせ、その時期に応じて必要なテーマ設定を行い、情報を発信する。学外組織との連携においては、全国私立大学 FD 連携フォーラム、関東圏 F D 連絡会に参加する。</p> <p>⑧学生 FD スタッフの活動をととした授業改善提案を支援する。</p> <p>⑨2014 年度より発行を開始した FD 推進センター Newsletter について、年 8 回程度発行し、各学部をはじめとする教学単位の取り組みを探し、全学へ情報の発信を行う。FD ハンドブック (Web) において、「法政教員の輪」の記事を年 10 回掲載する。</p> <p>⑩学習支援ハンドブック 2016 年度版の作成を行う。また、第 8 回 FD 学生の声コンクールの企画・実施を行う。</p> <p>⑪授業支援システム運営委員会を開催し、広く意見を収集しながら改善・改修を実施する。</p>
No	評価基準	教育課程・教育内容 (市ヶ谷リベラルアーツセンター)
2	中期目標	2017 年度を目途に新しいカリキュラムを導入する中で、法政大学の教育課程の編成・実施方針に基づいた市ヶ谷リベラルアーツ教育カリキュラム体系の再構築を行う。
	年度目標	2017 年度を目途に新カリキュラムを導入するため、既存の科目を「基盤科目」「リベラルアーツ科目」「総合科目」の 3 つのカテゴリーに再配置し、カリキュラムの体系的・順次性を構築する作業を具体的に進める。
	達成指標	全ての開講科目を「基盤科目・外国語科目」「リベラルアーツ科目・外国語科目」「総合科目(教養ゼミを含む)」に再配置し、新カリキュラム実施に向けて調整や見直しを行う。

No	評価基準	教育課程・教育内容（小金井リベラルアーツセンター）
3	中期目標	関係学部の専門教育との関係に十分注意を払いつつ、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行うとともに実施体制の強化を行う。
	年度目標	①教養教育の目標についての議論、KLAC と関係学部の協力体制、責任分担の議論を引き続き継続する。特に、教養教育を担う教員が不足する状況下で、KLAC と学部との連携を検討し、教養教育の実施体制の強化を図る。 ②（イ）入学前教育・初年次教育における KLAC の役割を明確にし、その充実への貢献を図る。 （ロ）理系教養科目の改善結果の効果検証を行う。 （ハ）国際化に対応するための英語力を向上させる教育プログラムを検討する。
	達成指標	①KLAC 運営委員会、各分科会及びセンターのプロジェクトにおける議論の他、KLAC と学科間の意見交換を実施する。 ②（イ）2015 年度より理工学部で実施するリメディアル科目（入門数学、入門物理）の効果測定を行い、KLAC の役割についての検討に資する。 （ロ）新しいシラバスに対応した教科書の教育効果、科学実験の実施体制の見直しの効果を測定・分析する。 （ハ）2014 年度より設置されている英語教育改善検討プロジェクトにおいて協議を継続する。
No	評価基準	教育方法（市ヶ谷リベラルアーツセンター）
4	中期目標	市ヶ谷リベラルアーツ教育のカリキュラム体系において教育効果を最大限に発揮するために、履修指導体制を整備する。
	年度目標	カリキュラム体系化の骨子に則り、各群科目の年次進行的なカリキュラムツリー及び履修モデルを作成し、2017 年度ガイダンスで指導し得る可能性を探る。
	達成指標	各分科会・群科目の年次進行的なカリキュラムツリー及び履修モデルを作成し、体系性を可視化する。
No	評価基準	成果（市ヶ谷リベラルアーツセンター）
5	中期目標	教育目標の達成度を検証するために、成績評価の解析・検証を深化させると共に、担当教員の自己評価を加味することが、システム構築によって可能な状態にする。
	年度目標	引き続き成績評価の解析・検証を行うと同時に、教員の自己評価・自己検証に資する後シラバスの入力率を向上させるべく全科目担当教員に督促する。
	達成指標	各科目の GPCA を解析し、各分科会において検証を行う。また、後シラバスの入力率を、まずは専任教員に関して 50 パーセント台まで引き上げる。
No	評価基準	成果（小金井リベラルアーツセンター）
6	中期目標	教育の成果を測定するために必要となる指標を開発し教育の改善に活用する。
	年度目標	理工学部の数学のカリキュラム変更、及び数学と物理のリメディアル科目の導入の効果の検証のためのデータ収集とその活用方法の検討を行う。 それら以外の実施体制強化のための情報収集とその解析を行う。
	達成指標	入試経路別の理系教養科目の GP とリメディアル科目の受講との関係を調査する。
No	評価基準	教育研究等環境（市ヶ谷リベラルアーツセンター）
7	中期目標	時間割体系の構築により教室資源が最大限に活用される状態にし、履修登録システムの見直しにより適正受講者数を維持できるようにする。
	年度目標	教室規模と履修者数の間に著しい差異のある科目について、適正な受講者数を維持できるようにする。
	達成指標	履修登録者の上限について、教室規模等との諸条件を勘案した取り決めを作り、特にキャパシティーを大幅に超える科目に対しては、適正受講者数を維持するような仕組みを検討する。
No	評価基準	教育研究等環境（学習環境支援センター）
8	中期目標	教育および学びの質の向上を促進するため、学内の各施設・部署と連携して学生が利用しやすい学習環境を整備し、単位制度の実質化の観点から、さらなる教育・学習環境の整備と学生の主体的学習の支援のための全学的な施策の企画・提案・調整を行う。
	年度目標	①LE センターの活動内容及び現況を踏まえ、諸規定のあり方を見直す。 ②LE センター主導で設置した施設について、その運用を規定するガイドラインの見直しを適宜検討する。

		<p>③「ゾーニング（施設機能の集約化）」について、市ヶ谷建替工事の現況に則した新たなアイデアについて引き続き検討する。</p> <p>④ピアネット活動について、参加学生の活動管理と活動評価の運用実態を継続的にフォローするとともに改善事項を洗い出し、適宜対応策を講じる。</p> <p>⑤各関係部局におけるプロジェクトの実態をさらにきめ細かく把握し、部局間の創意工夫をもたらす相互連携のあり方について、具体的に検討する。</p> <p>⑥「ピアラーニングスペース」の活性化について、に学習ステーションと連携しながら具体的な方策を検討する。</p> <p>⑦小金井における正課外教育活動の可能性について、引き続き検討を進める。</p>
	達成指標	<p>①「ピアネット運営委員会」等関係諸規定を見直す。</p> <p>②2015年度新規開設「ピアラーニングスペース」ガイドラインの運用及び改定を行う。</p> <p>③LEセンター運営委員会において、市ヶ谷建替工事の諸影響を最低限抑える「新たなゾーニング」に関する具体策を検討する。</p> <p>④ピアネット活動において運用されているシステム（活動実態を記録する「e-ポートフォリオ」及び活動能力基準を評価する「ピアネットコンピテンシー」）について、その運用を行い、適宜改善を試みる。</p> <p>⑤LEセンター運営委員会において、各部局に「学生の学習環境ニーズに対する改善アイデア」提案を求め、併せて部局間相互連携の具体策を検討する。</p> <p>⑥「ピアラーニングスペース」と「学習ステーション」の連携策について検討を進める。</p> <p>⑦小金井キャンパスにおける正課外教育活動のあり方について検討を深める。</p>
No	評価基準	内部質保証（市ヶ谷リベラルアーツセンター）
9	中期目標	市ヶ谷リベラルアーツ教育のカリキュラム体系が適切に機能しているかを、全ての分科会において同一基準で分析して、全体の質保証が行われる状態にする。
	年度目標	昨年度独自に作成した「自己点検評価・現状分析シート」の各項目を見直し、より精密な質保証がなされるように検討する。
	達成指標	「自己点検・現状分析シート」の内容を、各分科会および学部の現状に即したものに見直し、改訂する。

## VI 2012年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

## VII 大学評価報告書

<b>大学評価委員会の評価結果への対応に関する所見</b>	
<p>市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、「新たな授業形態の導入に対する取り組み」について、シラバス記入を明示することによって、シラバスで新しい授業形態を明示した科目数が増加したこと、「(事)後シラバス」の導入によりシラバスに沿って授業がおこなわれているかの検証をしたことは、高く評価できる。</p> <p>小金井リベラルアーツセンターでは、大学評価委員会から指摘を受けた教育方法、成果、内部質保証について、いくつかの科目で成績評価に関する統計資料の作成や履修動向の調査がおこなわれ、活用されたことを評価したい。シラバスに関する事項や教員組織、内部質保証の取り組みについては継続的課題とされており、今後の取り組みに期待したい。</p> <p>学習環境支援センターでは、「校舎建て替え工事に伴う学習環境」について「ゾーニング（施設機能の集約化）」のあり方が継続的課題とされており、部局間連携によって学生への学習環境支援が低下しないよう特段の配慮をお願いしたい。</p>	
<b>現状分析に対する所見</b>	
FD 推進センター	
<b>1 教員・教員組織</b>	
1.1 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。	
<p>FD 推進センターでは、5つのプロジェクトとそれらの連携により、教員の質的向上を図るための方策が実施され、その検証も恒常的におこなわれている。各プロジェクトの役割は明確であり、それらの活動が教員の質の維持・向上に貢献していることは高く評価できる。</p>	
<b>社会連携・社会貢献【任意項目】</b>	

<p>教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。</p> <p>FD 推進センターでは、一般向けの企画として FD シンポジウムを実施し、社会への還元に努力している。さまざまな機会を通じて、FD 推進活動の成果を社会還元することに期待したい。</p>
市ヶ谷リベラルアーツセンター
<b>2 教員・教員組織</b>
<p>2.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。</p> <p>市ヶ谷リベラルアーツセンター（以下、ILAC と略す）では、各分科会単位でディプロマ・ポリシーを明文化して公開しているほか、ILAC 関連 6 学部でもそれぞれのディプロマ・ポリシーで教養教育の位置づけを明確にし、それに必要な卒業所要単位数を設定している点も適切である。</p> <p>また、専任教員の採用にあたっては、ILAC 運営委員会で科目を決定し、求められる教員の能力・資質については科目を管轄する分科会と学部との協議によって適切に運営されている。</p> <p>さらに、各分科会には委員長、各科目には科目責任者を置き、また 2014 年度から学部の特化した基礎科目については各学部の教授会主任が科目責任者となり、それぞれの責任の所在が明確となった。このように、教養教育の向上のためにも、ILAC と各学部との連携が一層進むことを期待したい。</p>
<p>2.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。</p> <p>ILAC では、幅広い領域にわたるカリキュラムの円滑な運営のために、各分科会委員長、各学部教授会主任、担当学部長を構成員とする分野横断・学部縦断の運営委員会、7 つの学問分野の分科会、法政学運営委員会、3D 教育システムスタッフ会議が組織され、総合的な観点から教育課程を判断できる教員組織となっている点が評価できる。</p> <p>また、採用人事においても、学部選出と ILAC 選出の選考委員が協議することで、学部・分野で年齢が著しく偏らないような配慮がなされており、適切である。</p>
<p>2.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。</p> <p>ILAC では、人事採用に関する申し合わせ事項を明文化し、運営委員会で共有されているほか、各学部でも採用規程が設けられ、適切に運用されている。そして、その申し合わせ事項の運用において問題点が発生した場合には、運営委員会で協議し改善し、各学部でも採用基準をチェックする仕組みを有していることは高く評価できる。</p> <p>なお、教養教育担当の兼任人事は、募集・採用についての規程がなく、各分科会がその都度適任者を推薦する仕組みとなっている。学部組織との関係で、規程として制定することはむづかしいかもしれないが、過去からの申し合わせ事項を整理して文書を整えていくことを期待したい。</p>
<p>2.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。</p> <p>ILAC では、FD 推進センターによっておこなわれる授業改善アンケートの集計結果を、各分科会・学部で共有しているほか、各教員に提供されている。また、3 種類の授業参観（相互参観に加えて、新人研修参観、ビデオによるセルフ授業参観）が各分科会・学部の状況に合わせておこなわれ、13 科目の参観が実施されたが、さらに多くの授業参観が実施されることを期待したい。そして、その成果・効果などの検討を期待したい。</p>
<b>3 教育課程・教育内容</b>
<p>3.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。</p> <p>ILAC では、0 群から 5 群の科目群からそれぞれ万遍なく科目履修することで、多岐の分野にわたる教養が身につけられるようなカリキュラム編成となっている。</p> <p>2014 年度には、カリキュラム委員会や「教養履修モデルプロジェクト」が設置され、「履修モデル」を例示して専任教員のアンケート調査などをおこない、2017 年度実施予定の「カリキュラム・フレームワーク」についての各分科会・学部の大方の合意を取り付け、それに向けた具体的なカリキュラム構築作業に着手することになったが、大きなカリキュラム改革であり、その成果に期待したい。</p> <p>初年次教育については 0 群の「基礎ゼミ」「入門ゼミ」等、キャリア教育については 0 群の「キャリアデザイン入門」が、原則、各学部設置されている。また、自校教育科目「法政学への招待」は 4 年を経過し、本学を見直す初年次教育として評価できる。</p>
<b>4 教育方法</b>
<p>4.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。</p> <p>学生の履修指導は、ILAC 関連 6 学部の履修要項、ILAC 発行のシラバスの要約を記載した冊子版シラバス、Web シラバスでおこなわれている。また、履修説明は学部ガイダンスやいくつかの分科会でもおこなわれている。窓口での履修指導は、各学部窓口と ILAC 事務局が共同しておこなっている。全体として、きめ細かな対応がなされており、適切である。</p> <p>学習指導については、シラバスにおいて学生の指導方針を明示しているほか、個々の教員もオフィスアワーを設定して個</p>

別指導をおこなっている。科目責任者や分科会も指導をおこなっている。全体として、きめ細かな指導がおこなわれており、評価できる。
シラバスに【授業外に行うべき学習活動（準備学習等）】が明示され、学習時間を確保することに努めている。分科会単位で独自の取り組みもある。
2014年度のシラバスから「授業の概要と方法」の欄が新設されて、PBL（問題または課題解決型授業）、グループワーク、プレゼンテーションの有無を記入する項目が設定されたことにより、多くの科目でそれらの方法を取り入れていることが判明しており、評価できる。「自然科学分科会」の「自然総合講座A・B」におけるグループによる取り組み、英語分科会の一部授業における新作成のハンドブックの活用、文学部の基礎ゼミでのプレゼンテーションやディスカッションなどの積極的採用などは、今後の成果が期待される。
4.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
ILACにおけるシラバスが適切に作成されているかの検証は、2012年度から冊子版シラバスとWebシラバスとを活用することで学生への利便性を図り、2013年度からILAC事務局によるシラバス原稿チェックと教員への訂正の促しがおこなわれ、2014年度から新任教員については各分科会委員長による内容チェックがおこなわれている。そのほか、自校教育科目などでは、ILAC運営委員会や担当者全員でシラバスの確認・検証をおこなっており、適切である。
担当教員に、シラバス各項目の達成度の自己評価を調査した結果、ほぼシラバス通りに授業がおこなわれていることが検証され、変更したケースについてもその理由が明記されてその妥当性が確認されたことは、高く評価できる。
4.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
ILACでは、シラバスに「成績評価基準」を設定し、学生に公開することで公平性を保証している。また、分野別・学年別GPCAの集計結果を運営委員会で審議し、また分科会・学部でも共有して検証をおこなっており、適切である。
4.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
ILACでは、毎年、授業改善アンケートの教育成果項目を、科目別・分野別に集計し、運営委員会審議後、分科会・学部で共有され、検証がおこなわれている。また、卒業生アンケートの分野別の満足度についてもILAC独自に解析をおこない、問題の有無が検証されている。さらに、「法政学への招待」（自校教育科目）およびキャリア教育関連科目でも、運営委員会で定期的な教育成果の検証をおこなっており、適切である。
<b>5 成果</b>
5.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
ILACでは、成績評価に基づき学習成果が測定されている。成績評価や授業改善アンケートの「授業で身についたこと」については、分野別に集計され、学生の達成度が検証されている。しかし、個別授業の教育成果の確認については組織的な取り組みがおこなわれておらず、今後の取り組みに期待したい。
前年度の学年別・分野別・科目別・学科別の成績分布が集計され、運営委員会で検討後、分科会・学部と共有することで、成績分布およびEスコア（試験放棄）の割合が検証されていることは評価できる。
小金井リベラルアーツセンター
<b>6 教員・教員組織</b>
6.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。
小金井リベラルアーツセンター（以下、KLACと略す）では、教員配置についてこれに参加する理工学部と生命科学部の教授会が責任を負うことを「理工学部・生命科学部・KLAC 教養教育に関する申し合わせ」で定めている。
教員に求める能力や資質等については、関係学部において規程が定められている。
KLACの組織上の必要な役割分担や責任体制については、「理工学部・生命科学部・KLAC 教養教育に関する申し合わせ」において、理工・生命科学部教授会およびKLACの3者の責任分掌の基本方針が定められており、適切である。
6.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。
KLACでは、教員数の不足により生じるカリキュラムの不履行を避けなければならない。このため、学部教員の配置をはじめ、教養教育担当の補充すべき教員数についても、理工学部教授会、生命科学部教授会およびKLACの三者で審議し、不足する場合は理由・根拠を示して大学理事会、関係諸機関と協議し、速やかな改善を目指すべきであろう。
教員の新規採用人事は、KLACに参加する学部の管轄下にあるため、三者の責任分掌を明確にし、教員配置に責任を負うことになっており、適切である。
6.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。
専任教員の募集・任免・昇格については、KLACに参加する理工・生命科学部の責任においておこなわれているので、該当しない。（兼任教員については、「兼任講師の任用基準」が定められている。）
6.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

KLAC では、「数学基礎力保証」検討チームが開催した「大学・付属校「教育研究連携フォーラム（数学）」」に全面的に協力することにより、教員の資質向上を図るための一助としたことは評価できるが、なお一層の推進に期待したい。

## 7 教育課程・教育内容

### 7.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

KLAC が責任を負う教養科目については、3つの「科目群」とそれを細分化した「系」に区分されている。各「系」ごとの履修者数の調査により、一部の「系」に偏ることなく履修されていることが検証されており、評価できる。

初年次教育については、科学実験、情報処理技法において実験レポートの書き方、ICT スキルの訓練、上級学年での実験、さらに卒業論文につながる基礎を身につけさせている。また、理系教養科目では、リメディアル教育の要素を含めた専門教育の基礎固めをおこなうよう配慮されており、適切である。

キャリア教育については、教養科目「キャリアデザイン」を開講しているほか、理系学部ならではの「科学技術史」、「先端技術・社会論」、「技術者倫理」、「情報倫理」等の開講により技術と実社会との繋がりを意識させており、評価できる。

## 8 教育方法

### 8.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。

「理工学部生のための履修の手引き」、「生命科学部生のための履修の手引き」において、科目区分ごとの目標が明示されている。英語および選択語学系については、詳細な記述とともに担当教員による選択語学ガイダンスを実施し、教養科目の履修についても事務部と担当教員との連携による履修指導がおこなわれており、そのきめ細かな履修指導は評価できる。

教養科目としての英語科目および実験系科目については、学習指導に関して具体的な対応がなされている。また、レポートの添削指導をおこなうことにより、レポート作成技術の向上が図られている。

科学実験では、毎回レポートを課し、レポートに予習・復習を盛り込むことにより、学習時間が確保されている。また、物理実験では、授業時間内提出のレポートと1週間後提出のレポートを課し、学習時間の増加を図るとともに、レポート提出の際には試問をおこなうなどして知識の定着を確認しており、評価できる。

新たな授業形態の取り組みについては、SAプログラムの単位認定を、教養科目の「科学技術コミュニケーション演習」としておこなっている。また、英語教育改善検討プロジェクトの設置による英語能力の向上、数学や実験の改善、理工学部生向けの数学系カリキュラムの改善などに取り組んでおり、その成果が期待される。さらに、科学実験終了後に話す能力と聞く能力を育成する目的のためにグループディスカッションをおこない、座学重視ではない授業形態の展開に取り組んでおり、評価できる。

### 8.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。

KLAC では、理系教養科目数学系および自然科学実験についてシラバスが統一され、すべての学生が最低限必要な事項を学べるよう配慮されており、評価できる。英語科目・諸外国語科目については、専任教員が毎年科目を決めてシラバスの内容をチェックしており、適切である。

授業がシラバスに沿っておこなわれているかについては、英語科目・諸外国語科目で打ち合わせ会が実施されているほか、専任および兼任を含めた担当教員同士の打ち合わせ会や日常的な業務連絡においても検証がなされており、評価できる。

2015年度から数学系科目のシラバスの改訂が実施され、シラバス内容の消化の度合いについてのアンケート実施が予定されており、その検証を待ちたい。

### 8.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。

成績評価と単位認定については、理工学部・生命科学部ともに、学生申告による成績評価の調査申請が制度化されており、また理系教養科目数学系の複数教員担当科目における成績の比率調整がおこなわれ、評価できる。しかし、統一シラバスでの授業において2分割したクラスの成績に差が生じている問題については、成績評価の公平性の観点からその検討を期待したい。

### 8.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

KLAC では、在学生全員参加の3回のTOEIC試験を実施することによって、英語科目の習熟度別クラス運営に活用しているほか、プレースメントテスト、理系教養科目（数学・物理）についても成績の推移を入試経路別に調査し、高大連携の議論等に活用されており、評価できる。

FD推進センターからのデータに基づく教育成果の検証方法についての検討が開始されているので、さまざまな観点から有効活用されることを期待したい。

各教員に対して、FD推進センターから授業改善アンケートの結果が送付され、学生の自由記述についてはセンター長が確認するほか、理工学部では回答した学生のGPA値と対比できる形で各教員にフィードバックされており、評価できる。

## 9 成果

### 9.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。

KLAC では、学習成果については各科目ともにレポート・定期試験等で測定されている。科学実験においては、レポートに重点をおいて測定されているが、試問による実験背景・実験内容の理解度や到達度の測定もおこなわれており、評価できる。成績分布、試験放棄について、FD推進センターおよび小金井事務部から提供されたデータをもとに、KLAC 独自の分析が開始されており、その結果を待ちたい。また、多くの学生が数学の履修から逃避している状況が明らかになったことで、数学系教養科目の一部の必修化を図ったことは評価できる。

#### 学習環境支援センター

### 1 0 教育研究等環境

#### 10.1 教育研究等を支援する環境や条件は適切に整備されているか。

学習環境支援センターでは、「学習環境」の定義および役割の明確化と情報の共有化のため、各部局からの委員会への報告を継続している。とくに、「ゾーニング(施設機能の集約化)」の観点から市ヶ谷キャンパス内の「アクティブラーニング」機能施設の開設を実現させる運びとなり、また「ピアネット(相互学習のネットワーク化)」支援でも学生の正課外活動の導入、監理、評価すべての段階で一定の成果を上げており、評価できる。

#### 共通

### 1 1 管理運営

#### 11.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。

##### 【FD推進センター】

FD推進センター規程に基づき、センター長、プロジェクト・リーダー、プロジェクト・メンバー、アドバイザー・ボード・メンバーを置き、同規程に定められた職務が実行されている。

##### 【市ヶ谷リベラルアーツセンター】

市ヶ谷リベラルアーツセンター規程に基づき、正副センター長、7分科会委員長が置かれ、その運営委員会には教育開発支援機構長、6学部の教授会主任、2名の学部長会議代表者を追加したメンバーで構成され、同規程に定められた職務が実行されている。

##### 【小金井リベラルアーツセンター】

小金井リベラルアーツセンター規程に基づき、正副センター長をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会の組織を設け、同規程に定められた職務が実行されている。

##### 【学習環境支援センター】

学習環境支援センター規程に基づき、センター長をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会、ピアネット実行委員会を設け、同規程に定められた職務が実行されている。

全体として、各センターとも各自の規程に基づき、運営委員会等によって職務が実行されており、適切である。

### 1 2 内部質保証

#### 12.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。

質保証委員会の活動ならびに内部質保証活動については、以下の通りである。

##### 【FD推進センター】

アドバイザー・ボードは年3回(2014年度実績)、プロジェクト・リーダー会議は年10回(2014年度実績)開催された。教員の参加状況は、教育開発支援機構長、センター長、アドバイザー・ボード、プロジェクト・リーダーおよびプロジェクト・メンバーが事業活動に参加し、アドバイザー・ボードの教員メンバーの参加率は平均およそ60%(2014年度実績)であり、学部長会議を通じてその参加の徹底を要請されているものの、より多くの参加を期待したい。

##### 【市ヶ谷リベラルアーツセンター】

2013年度から「内部質保証委員」を置き、各質保証組織(運営委員会、7分科会、6学部)から提出されたチェックシートの内部監査をおこない、そこで出された疑問点・改善点の指摘を受けて、各質保証プロセスで改善を図り、その改善のPDCAサイクルで質保証が機能する体制が整えられていることは評価できる。また、教員の参加状況は、欠席者には代理出席を求めているため、ほぼ100%の専任教員が出席していることが評価できる。

##### 【小金井リベラルアーツセンター】

小金井リベラルアーツセンター運営委員会を年5回(2014年度実績)開催し、このなかで質保証の議論がおこなわれている。教養科目を担当する専任教員による各分科会の構成メンバーの代表者が運営委員会メンバーとなっているが、教員の参加状況について記載してほしかった。

##### 【学習環境支援センター】

運営委員会は年10回(2014年度実績)開催し、質保証の検討がおこなわれている。教員の参加状況は、センター長、教育開発支援機構長、運営委員として3キャンパス図書館長・副館長から1名、学習ステーション長、プロジェクト・リーダー

<p>が参加し、その他必要に応じて総合情報センター教員、FD推進センタープロジェクト・リーダーが参加している。</p> <p>全体として、各センターとも内部質保証の活動においても積極的姿勢がみられ、教育開発支援機構の全体会議でもそれらの情報を共有しあい、なお一層の成果を期待したい。</p>
<p><b>2014年度目標の達成状況に関する所見</b></p> <p>FD推進センター、市ヶ谷リベラルアーツセンター、小金井リベラルアーツセンター、学習環境支援センターでは、それぞれが設定したすべての目標において、「S」あるいは「A」の成果として自己評価されており、客観的にみてもその成果は妥当であると考えられる。改善策に盛り込まれた項目については、その検討についての成果に期待したい。</p>
<p><b>2015年度中期・年度目標に関する所見</b></p> <p>2015年度の年度目標として、FD推進センターが「教員・教員組織」に関して11項目、「教育課程・教育内容」に関してILACが1項目、KLACが2項目、「教育方法」に関してILACが1項目、「成果」に関してILACが1項目、KLACが1項目、「教育研究等環境」に関してILACが1項目、学習環境支援センターが7項目をそれぞれ明示している。各センターとも、現状分析を踏まえたうえでの年度目標となっており、達成指標として具体的な政策内容や定量的指標が示されており、達成度をわかりやすく測定できるようになっていることは、高く評価できる。</p> <p>なお、現状分析シートの最後に記載される「Ⅲ. 重点目標」は、各センターともきわめて重要な課題であるので、よい成果が出ることを期待したい。ただし、FD推進センターの重点目標の記載などは、「年度目標のうち、特に重視する目標を挙げてください。あわせてその目標を達成するための施策等についても記載してください。」という指示に対して適切とは言えないところがあるので、注意していただきたい。</p>
<p><b>総評</b></p> <p>FD推進センターでは、「学生による授業改善アンケート」のWeb実施によって回答率向上のための施策検討が重点目標のひとつになっているが、このアンケートが教員の資質向上に果たした役割は大きいとみられるので、その項目の見直しとともに、その成果に期待したい。</p> <p>市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、各分科会・学部教授会の大方の合意を取り付けた「カリキュラム・フレームワーク」の具体的な取り組みと、実質的なカリキュラムの体系化の方途の検討に期待したい。</p> <p>小金井リベラルアーツセンターでは、国際化に対応できる英語力の強化、理系基礎科目の点検・強化が重点目標として設定されており、その目標は明確であるためその成果に期待したい。</p> <p>学習環境支援センターでは、学習環境支援に関係する部局職員による「相互連携の創意工夫」を重点目標として掲げ、ボトムアップ型の会議体の運営・組織づくりを目指して学生の学習環境支援を充実させようとしていることは、ひとつのあり方として評価できる。とくに、校舎建替え工事に伴う学習環境への影響については特段の配慮を願いたい。</p>